

# 「都市エスニシティ論」の「語りの方

—「行為体-志向の都市理論」との「交差点」で—

広田康生

## A Discourse of “Urban Ethnic Studies” and “Strong Case for a Narrative Approach”: At an intersection of “Agency-oriented Urban Theory”

HIROTA, Yasuo

**要旨:** 本稿は、筆者の「都市エスニシティ論」における一連のエスノグラフィックな研究（広田, 1997 [旧版]; 広田 [新版], 2003b; 広田・藤原, 2016 [共著]）で描いてきた「生き方」とその「理論的世界」および筆者なりの「エスノグラフィーの方法論」（＝フィールドからの理論）を「語りの方のための説得的な事例と言説」という言葉（Smith, 2001: 118）を手がかりに呈示することにある。筆者は、「前稿」で（広田, 2022a）、日本の都市社会学における都市エスニシティ論の成立と、その展開のなかでの筆者なりの（フィールドからの）「都市エスニシティ論」の「研究の軌跡」を簡潔に「整理」したが、本稿は、フィールドからの「都市エスニシティ論」の「深化」「拡大」に沿って展開した筆者の「方法論」と「理論的世界」を、「行為体-志向の都市研究」に「交差」させつつ——すなわちそこから「示唆」を受け、同時に筆者の「フィールド」からの「問題提起」を組み合わせることで——描き出す試みである。以下、1で本稿の意図を述べた後、2の2.1で筆者の「前稿」（広田, 2022a）で記述した「フィールドからの理論」の「論点」を確認し、2.2で、その初発の「論点」が、特に『共著』（広田・藤原, 2016）のなかでどのような「語りの方のための事例と言説」をとおして「深化」「拡大」した「ポイント」を示し、3で、その「フィールド」からの「語りの方」の過程を詳しく説明し、最終の4で、筆者の（フィールドからの「都市エスニシティ論」の「理論的世界」の「意味」を、「行為体-志向の都市研究と実践」と「交差」させつつ説明する。本稿は筆者にとって、「都市エスニシティ論」のエスノグラフィーの「方法編」でもあり、都市エスノグラフィーの筆者なりの「理論的世界」である。  
**キーワード:** 「行為体と主体」「トランスナショナル・アーバニズム論」「文脈の偶発性と一時的縫合」「場所の感覚」「都市エスニシティ論の理論的世界」「都市エスノグラフィーの理論」「語りの方」

### 1. はじめに

筆者の「都市エスニシティ論」（広田, 1997 [旧版]; 広田, 2003b [新版]; 広田・藤原, 2016 [共著]）は、「新自由主義グローバリゼーション時代」から解体と再組織化の混沌の現在まで、一貫して「越境」「境界」「異質性」の中で生きる人々の「生き方」を、「日常実践」と「場所」に焦点をあてて描いた都市エスノグラフィー的研究である。筆者の「都市エスニシティ論」のエスノグラフィックな研究の方法は、あくまで筆者の「足場」からの「経験」あるいは「フィールド」からの「経験」を「概念化」し、それに筆者の「意味」を与え、ある「理論的世界」を見出そうとする研究である（広田, 2022a）。ただし前者の『拙著』（広田, 1997 [旧版]; 広田, 2003b [新版]）から『共著』（広田・藤原, 2016）まで

の「フィールド」において筆者は、「日常実践」と「場所」に関する「現実」やその「意味」に関する「深化」「拡大」に沿いつつ、筆者の（フィールドからの）「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を描くときの重要な「文脈」「ポイント」を探してきた。本稿では、前述の「日常実践」と「場所」に関する「フィールド」からの「経験」や「論点」がどのように出現し、筆者はそれをどのように捉え、「語り」「表現」したかを「語りの方」のための事例と言説に注目して明らかにしてみたい。この「語りの方」とは、「(下からの)トランスナショナルリズム論」や「トランスナショナル・アーバニズム論」、特に「行為体-志向の都市研究と実践 (agency-oriented urban and practice)」（Smith, 2001: 6）の中で説明される考え方であり、そして、それらの「考え方」は、「フィールド」からの筆者の「都市エスニシティ論」にとっては重要な方法論でもあり、「理論的世界」を構成する概念でもある。タイトルの副題にある筆者が言う「行為体-志向の都市研究と実践」

あるいは「行為体-志向の都市理論」(Smith, 2001: 6)とは、「(下からの)トランスナショナリズム論」の、ひとつの中心的な「理論」である(広田, 2003b: 325-355)。筆者にとってそれは、筆者の「足場」での「経験」やわれわれに「問いかけられたもの」を理論的に考える時、われわれと「離れて屹立する」ような「制度」や「考え方」ではなく、それを、われわれの「意味-形成」のプロセスに関連させてつくり出される「考え方」を指す(Smith, 2001: 49; 広田, 2022b: 68-69)。

筆者は、『拙著』(広田, 1997; 2003b)の「研究の軌跡」をまとめた「前稿」(広田, 2022a)で、「日常実践」の「主体」を「物語を産出する行為体」として提示し(広田, 2022a: 63-65)、「繋留点」や「拠点」という言葉で表現した「場所」の「概念」を、その後の『共著』(広田・藤原, 2016)のなかで「場所-形成」として提示したが、そこには「フィールド」での、どのような「論点」の「深化」「拡大」があったのか、そしてそれらの「日常実践」と「場所」はどのように「連結/節合」し、新たな「論点」を生み出し、「(下からの)トランスナショナリズム論」や「トランスナショナル・アーバンリズム論」(広田, 2003b: 325-355)における理解とどのように「接合」したのか、その結果、筆者なりの「都市エスニシティ論」における「人びと」(行為体や主体/アイデンティティ)にどのような「論点」を加え、筆者の「都市エスニシティ論」の「理論的世界」をどのように構成したかを、「語り」も含めて描き、その「理論的世界」を呈示することが本稿での筆者の最終的な課題である。

以下本稿の2の2.1では、筆者の「前稿」(広田, 2022a)に引き続き、筆者の「都市エスニシティ論」の「フィールドからの理論」の「論点」を再確認し、2.2では、3での『共著』(広田・藤原, 2016)での「論点」の「深化」と「拡大」の「道筋」(と「語り」の方法のための事例が生まれる時点)を前もって示し、3での、初発の『拙著』(広田, 1997; 2003b)の「論点」であった「行為体」「主体」「異質性認識」「日常実践」「場所」といった問題が「フィールド」のなかで「語り」の方法のための事例や言説をとおしてその「意味」がどのように「深化」「拡大」し、現在の筆者の「都市エスニシティ論」の「理論的世界」になったのかを「フィールド」から遡行しつつ示す。実際、この「フィールド」での「具体的」で「細やか」で「見過ごしがちな」過程と「語り」こそが、筆者の「フィールドからの理論」あるいは「都市エスノグラフィックな研究」の「語り」の方法

の事例や言説」の方法論となり、筆者の「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を構成する「道筋」になる。そして、最後の4で筆者は、これまでの「フィールドからの経験」や「論点」を、「行為体-志向の都市研究と実践」(Smith, 2001)の「考え方」に相互参照させ、筆者なりの「都市エスニシティ論」の「理論的世界」の「考え方」を示したい。

## 2. 「フィールド」からの「出発点」の確認と「語り」の方法のための事例と言説

### 2.1 「前稿」(広田, 2022a)の「論点」再確認

前述の「前稿」(広田, 2022a)で筆者は、いわゆる「新自由主義のグローバリゼーション時代」に出現した都市エスニシティ論を、グローバル化に直面するそれぞれの研究者が、それぞれ独自のテーマを展開するためのひとつの「文脈」(あるいは「スプリングボード」として考えた(広田, 2022a: 53)。そして特に筆者の「都市エスニシティ論」は、「異質性認識」から生まれる「日常実践」と「場所」に焦点を合わせ、その人びとの「生き方」と彼らを取りまく「世界」をどのように「乗り越える」かを、「フィールドからの理論」あるいは「エスノグラフィックな研究」として考えた。そして、上述の「前稿」(広田, 2022a)では、1)『拙著』(広田, 1997; 2003)においては、「越境者-エスニシティ」と「共振者」——それが他のエスニシティであれ日本人であれ——が、「異質性認識」にもとづく「日常実践」を「フィールド」で行い、2)「日常実践」を生み出す互いの「異質性認識」を、「行為主体はどのようにして他者の中に自分自身を見るようになり・・・自分自身の中に他者を見るようになるか」(Gilroy, 1996=1998: 147; 広田, 2022: 63)という過程として考え、それ自体が「乗り越え」への「実践」のさまざまな「土台」となること、3)その「乗り越え」を筆者らが理解するための方法として、「フィールド」での「会話」や「行為」とおして、彼らから筆者らに「問いかけられたもの」を、どのように「受け止め」「考える」かを、「現場」での重要な「論点」として、提起した。たとえば筆者は、具体的には鶴見のある「場所」(ある意味でそれは、「沖縄タウン」「沖縄村」という歴史性が「意味付け」られた「場所」)で、「移動」した当時「日系南米出身者」と呼ばれた人々と彼らに「共振する人々」——その多くは沖縄出身の移民の「先住者」やその「関係者」や「帰還移民」といわれた人びと、そして彼らと相互作用する「日本人居住者」やその他のエスニシティ——と

の「会話」や「実践」の中から、「繋留点」「越境者-エスニシティ」「共振者」「エスニック・ネットワーク」「日常実践」という「概念」を「フィールド」から掬い出し、4) 彼らの存在を「生き」「乗り越え」ようとする人びとと「共振者たち」を「物語を産出する行為体」と考え、彼ら同士の「異質性認識」にもとづく「日常実践」を、「越境」「境界」「異質性」を「生き」「乗り越え」ようとする「個」の「態度」や「相互作用の試み」の過程を研究することを、筆者の「都市エスニシティ論」のエスノグラフィックな「フィールドからの理論」と呼んだ(広田, 2022b: 59-64)。これは、前出の『拙著』(広田, 1997; 2003b)の「原点」であった。

もちろん、彼らの「物語」やその背景にある「批判性」を提起する「世界」や、筆者の「フィールドから認識する方法」、そしてそれに「リアリティ」を付与する「考えかた」として筆者は、具体的には『拙著』の「終章」(広田, 2003b: 325-355)で、「(下からの)トランスナショナルリズム論」に依拠していること、その後出版された『共著』(広田・藤原, 2016)では、まだ概論的ではあったがM・P・スミス(M.P. Smith)の「行為体志向の都市研究と実践」(Smith, 2001: 49)にイメージを受け、筆者の「都市エスニシティ論」の参考とした(広田, 2022b: 68-69)。無論、筆者のこの「考え方」の「底流」には、シカゴ社会学の「都市エスニック研究」の「相互作用論」が影響していた(Faris, 1967=1990; 広田, 2021; Persons, 1987等)。

## 2.2 『共著』(広田・藤原, 2016)での「深化」「拡大」を描く「都市エスノグラフィー」の過程のポイント ——「都市エスニシティ論」のための「語りの方法」の事例と言説

筆者の「都市エスニシティ論」の諸概念は、『拙著』(広田, 1997; 2003b)の「フィールド」から生まれ、その多くは『共著』(広田・藤原, 2016)で、「日常実践」と「場所-形成」論あるいは「場所の意味-形成」論と結合し、「都市エスニシティ論」に新たな「深化」「拡大」をもたらし、新たな「論点」を提起し、現在、「行為体志向の都市理論」と「交差」しながら、本稿4での筆者が描く「都市エスニシティ論」の「理論的世界」に繋がっている。2.2では、3の「フィールド」からのその「道筋」に向かうための「都市エスニシティ」の「語りの方法のための事例と言説」を探る過程の「道標」を立てておきたい。それは、筆者にとっては、筆者なりの「都市エスニシティ論」を構成する『拙著』(広田,

1997; 2003b)から『共著』(広田・藤原, 2016)へという二つのエスノグラフィーを繋いで「都市エスニシティ論」の「理論的世界」へと向かう「道筋」であり、「方法論」である。

筆者の「都市エスニシティ論」の『拙著』(広田, 1997; 2003b)での「日常実践」と「繋留点」としての「場所」概念に関わる「論点」が、『共著』(広田・藤原, 2016)で「深化」「拡大」し、新たな「論点」を持ち出す過程には、特に『拙著』(広田, 2003b)での後半部に既述した、鶴見から群馬県大泉町や東京新宿の通称コリアタウンや「B-通り(通称イスラム・スポット)」における「エスニック・ビジネス」における「日常実践」や「場所」の「フィールドの経験」と「語りの方法」のための事例と言説が、その素地になった(広田, 2003b: 229-298)。筆者にとっての「日常実践」と「繋留点としての場所」に関する概念の結合という新たな「論点」を見つける「素地」は、「エスニック・ビジネス」や「エスニック・スクール」等々での「フィールドで気付いた言説や事例」から生まれた。前述の筆者の『拙著』(広田, 2003b)の「第5章」の「注2」では、筆者がなぜ、鶴見から群馬県大泉町での「エスニック・ビジネス」に興味を持ったか、東京新宿のコリアタウンの通称「イスラム・スポット」等における「場所」に「フィールドワーク」を展開したのかに関する説明がある。「同章 第2節 2 エスニック・ビジネス起業家の「生き方」とアイデンティティ」と題した箇所では、群馬県大泉町での筆者の、「場所-形成」「場所への意味付け」の萌芽となる「施設」の建設(「ブラジリアン・プラザ」)が掲載されている(広田, 2003b: 252-280)。もちろんこの段階では、筆者は、「フィールド」から「日常実践」と「場所-形成」との結合に至る新たな「論点」としての「場所への意味付け」に関しては、まだ、「エスニック・ビジネス」や「エスニック・スクール」等々の向こうにあった。

しかし、筆者の「都市エスニシティ論」の初期の「越境者-エスニシティ」「日常実践」「場所」といった「論点」が、「語りの方法のための事例」とおしてどのように「深化」「拡大」し、現在の筆者の「日常実践」と「場所-形成」論の結合という「都市エスニシティ論」の「論点」に至る過程は、筆者の場合、後述の3の3.1で示すように、「場所への意味付け」という「語りの方法のための事例と言説」がどのように出現してきたか、そして、初期の「日常実践」や「場所」を支える「理論的世界」としての「(下からの)トランスナショナル



ズム論」や「トランスナショナル・アーバニズム論」の「考え方」が、「フィールド」から、「リアリティ」をもって出現したかに目を向けなければならない。筆者にとってそれは、「フィールド」の過程としては、「エスニック・ビジネス」や「エスニック・スクール」の「語り」をとおして筆者の「都市エスニシティ論」に出現した。実際、筆者の鶴見を出発点とした「都市エスニシティ論」の初発の「論点」は、群馬県大泉町や東京新宿の通称「コリアタウン」や「B-通り（通称イスラム・スポット）」の「フィールド」をとおして、後に『共著』（広田・藤原, 2016）での、山口県「周防大島・沖家室」からの布哇「カカアコ」「ア・アラ」への「移動」の、「場所の獲得」「場所の意味付け」に関するいわゆる「初期トランスナショナルリズム論」の「語りの方」の説得的な事例と、N.Y.の「イースト・ビレッジ」での「短いフィールドノート」からの「主体/アイデンティティ」「場所の意味付け」「場所への繋がり」に関する「論点」に繋がっている。それは、「都市エスニシティ論」に「通底」する「日常実践」と「場所-形成」の「意味」をさらに「深化」「拡大」し、「行為体-志向の都市理論」での「考え方」と「交差」し、筆者の「都市エスニシティ論」の「鍵的経験」になった。そこで以降、3の3.1では、まず筆者の『共著』（広田・藤原, 2016）での「日常実践」と「場所-形成」の結合と初期の「論点」の「深化」と「拡大」に至る前提として、特に、鶴見潮田から群馬県大泉町での「フィールド」からの「経験」がどのように「(下からの)トランスナリズム」に「リアリティ」を与えたかその「道筋」を遡行し、その過程で、拙著（広田, 1997: 45-78; 広田, 2003b: 60-92）での筆者の「都市エスニシティ論」の「生き方」を考えるために当時の都市社会学で使用されていた「移民」に関わる「諸概念」である「エスニック・ビジネス」や「通称エスニック・スクール」が、「日常実践」と「場所」との結合のための、筆者にとっての「フィールド」での「準備過程」であったのかを再提示する。3.2では、それが、どのような「経験」をとおして、「場所-形成」に移動したかを、いわばフィールドワークでの「きっかけ」に遡行する。特に、新宿大久保・百人町での「B-通り（通称イスラム・スポット）」を舞台に、「フィールド」からの「経験」や「風景」の変化や「会話」の「場所への意味付け」を確かめ、同時に、3.3では『共著』（広田・藤原, 2016）にまとめられた「周防大島・沖家室」からのホノルル・アアラやカカアコへの「移動」と「日常実践」と「場所-形成」（そ

れはいわば日本での「(下からの)トランスナショナルリズム」にとっての、「初期トランスナショナルリズム」の「古層」であると筆者は考えるが)、そして現在の「イースト・ビレッジ」での「場所の意味付け」と「主体」に関する「フィールドからの経験」についての「論点」に繋がる（広田・藤原, 2016: 117-143 [第4章]: 161-200 [第6章]）。この3での「フィールドからの経験」の「道筋」は、4で「行為体-志向の都市理論」と「交差」しながら、筆者なりの「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を支える「フィールド」での「道筋」である。

### 3. 「都市エスニシティ論」の「フィールド」「越境」「境界」「異質」の中の人々の「生き方」の深化と拡大——「語りの方」のための事例と言説」の過程に焦点をあてて

#### 3.1 「日常実践」と「場所-形成」の「(下からの)トランスナショナルリズム」の「リアリティ」を「語るための事例と言説」

「越境」「境界」「異質」の中の人々の「生き方」を求めた筆者の「都市エスニシティ論」は、「フィールド」から立ち上がった「越境者-エスニシティ」「エスニシティ経験」「共振者」「日常実践」等々の「語りの方」のための事例と言説」が対象とする「理論的世界」を求めて、『拙著』（広田, 1997 [旧版])——それは『拙著 [新版]』にも掲載——において、「2 接近方法とその枠組み」と題した節で（広田, 1997: 45-78; 広田, 2003b: 60-92）、たとえば、E・ボナシッチ (E. Bonachich) らの論文の「越境の」「エスニック・ビジネス」や「ミドルマン・マイノリティ」(Bonachich, 1973; 広田, 1997: 65-67; 広田, 2003b: 81-82) といった概念を引用したり、「家族の移動」「移民」「移民児童」「エスニック・スクール」等々の「家族の移民移動」をめぐる、C. スルズキー (C.E. Sluzki) による「移民と家族の葛藤 (“Migration and Family Conflict”）」(Sluzki, 1979) といった文献等を引用し、日本での都市エスニシティ論の「人々の生き方」の行動や「考え方」を理解するための「理論的世界」の可能性を考えてきた（広田, 1997: 58-59; 広田, 2003b: 73-75）。後述の「考え方」については、当時同じ地域（鶴見）で、移民児童の「生き方」や教育問題に取り組んでいた研究者にも使用された（志水, 2001）。[他の「移民児童」や「通称エスニック・スクール」等に関する「枠組み」の文献としては、広田, 2003b: 60-92参照]。

ただ筆者の「都市エスニシティ」の「生き方」を「語るためには、より社会、文化的な側面に注目する説得力のある事例や言説が必要であると感じていた。筆者は、その「世界」を示す、より「リアリティ」ある「言説空間」として、『新版』（広田, 2003b）では「(下からの)トランスナショナリズム論」に依拠した。

特にその「(下からの)トランスナショナリズム論」に関する「フィールド」からの「リアリティ」は、鶴見での「フィールドワーク」からは時期的に少し遅れ、1994年ごろから実施した群馬県大泉町での「エスニック・ビジネス」や「エスニック・スクール」に関する「フィールド」での「経験」から得られた（広田, 2003b: 229-298）。特に、筆者の群馬県大泉町での「エスニック・ビジネス」や「エスニック・スクール」の「フィールドワーク」は、鶴見での（「A-旅行社」に勤めていた）日系ブラジル人家族の「エスニック・ビジネス」——それは当時「東毛地区雇用促進協会」の中心であったY氏と知り合うきっかけになった——や、いわゆる「エスニック・スクール（N-学園）」（T氏）に関するフィールドワークでの「会話」が「起点」となった（広田, 2003b: 231-234）。無論、筆者の「(下からの)トランスナショナリズム論」への興味は、『拙著』（広田, 1997; 広田, 2003b）の「第1章」に記述した「単身者たち」「家族」「W氏家族」らの「エスニシティ経験」（広田, 1997: 13-43; 広田, 2003b: 27-59）や、グローバル化のなかでの、「必ずしも条件に関わらず自らの工夫で切り開いていく」という「日常の実践」として「フィールド」から推論していたが（広田, 1997: 75-123; 広田, 2003b: 93-138）、その「(下からの)トランスナショナリズム論」それじたいの「理論」に関する「リアリティ」は、この大泉町での「フィールド」でも再確認された。上記の大泉町でのフィールドワークの「会話」に掲載した「家族は、父母がいま沖縄にいる。弟は、浜松で仕事をしている。姉は千葉にいるし、妹はまだブラジルにいる。子供たちは、家庭ではポルトガル語と日本語の両方を使っている。いつか帰るかもしれないので、子供たちが日本の学校が終ってからブラジル学校に通っている。[日本に] 帰化するとブラジル国籍がなくなり、向こうで商売をするきっかけがなくなるので永住権はとる」（広田, 2003b: 260-261 [事例14]）は、「越境」「移動」と、「多重の居住」を象徴し、それは当時の日本の「フィールド」からの「説得力のある語り」としては、『拙著』（広田, 2003b）での「越境者-エスニシティ」や「日常の実践」を支える「世界」に関する「説得力のある

事例や言説」となった。当時の筆者としては、特にM・P・スミス（M.P. Smith）とL・E・ガルニゾ（L.E. Guarnizo）編の『*Transnationalism From Below*（下からのトランスナショナリズム論）』（Smith and Guarnizo eds. 1999）や、L・バッシュ（L. Basch）、N・グリック-シラー（N. Glick-Schiller）、C・スザントン・ブランク（C.S. Blank）共著『*Nations Unbound*（束縛が解かれた民族）』（Basch, Glick-Schiller, Blanc, 1994）での「論点」に親縁性を感じた。図式的には、「移民がその出身地（origin）と定住地（settlement）の社会を連結する、複雑な縫り合された社会関係を育みそして維持する諸過程を指す。われわれは、こうした諸過程をトランスナショナリズム論と呼ぶことによって、今日の多数の移民が、地理的、文化的、政治的な境界を跨いで形成する社会的な領域の存在を強調する」（Basch, Glick-Schiller, Blanc, 1994: 7）という「(下からの)トランスナショナリズム」の「理論的世界」のメタファーは、後に4でM・P・スミスが言う「地理的なメタファー」というよりは「社会、文化的メタファー」を暗示した。その「語りの方法のための説得力のある事例と言説」を筆者は、スミスとガルニゾの前述の『編著』を引用しながら、「多様なアイデンティティを持つ人びと、もしくは越境起業者による、こうしたいわば制度化された活動からは、こぼれ落ちても、『日常の実践』によって支えられておこなわれる、国境を越えたビジネス展開や異文化の「生き方」や「乗り越え」を『(下からの)トランスナショナリズム』と呼び……実際、越境移動者が、既存の地理的、文化的、政治的境界を跨いで社会的領域を形成していく過程は既存の国家的制度に抵触する様々な問題を提起する」と述べた（広田, 2003b: 329）。そしてこれは筆者にとって「日常の実践」と「場所」との結合の「素地」となった。

この「結合」に関する「フィールド」からの事例として筆者は、1996年に、群馬県大泉町の駅近くの、当時としては大きな「スーパー」で、大泉町への日系ブラジル人の「帰還移民」の「場所-形成」を暗示する動向に出会ったことがひとつのきっかけであった。「T-センター」経営者も含めて群馬県大泉町への「先遣隊」「先住者」については『拙著』（広田, 2003b: 255）の「事例11」や、「(通称)エスニック・スクール（N-学園）」での「会話」については『拙著』（広田, 2003b: 261 [事例15]）を参照して頂きたいが、「場所-形成」の設立は、1990年代前後に大泉町に移動し「レストラン」や「ブラジル系スーパー」等を経営していた「26人」の

「帰還移民」によって1996年6月、「ブラジリアン・プラザ」の名称で、「起業および店舗が集合する拠点・場所」を創り出した（それは「上毛新聞社」の丹念な取材によって有名になり、著書として刊行された）（上毛新聞社編, 1997: 119）。なお、筆者にとっての「ブラジリアン・プラザ」設立のフィールドワークは（広田, 2003b: 258-260 [事例12] [事例13]）——インタビューは1996年——を参照して頂きたい<sup>1)</sup>。

だが、この出来事やこれらのフィールドワークが、「場所-形成」そして「日常的実践」と「場所」の結合という「深化」と「拡大」に関する「語りの方のための説得的な事例と言説」であることに筆者は、特に「フィールド」ですぐに認識できたわけではなかった。むしろそれを象徴する出来事は、大泉町に近い町で「エスニック・ビジネス」を展開し、その後東京新宿の通称「コリアタウン」および「B-通り（通称イスラム・スポット）」で事業やモスクを創り出していた「イスラム系起業家」に会うまでは「日常的実践」と「場所」の結びつきには気付かなかった。1996年当時の「ブラジリアン・プラザ」は上記のY氏へのインタビューによれば、この「ブラジリアン・プラザ」は軌道になるかどうかの瀬戸際であり（広田, 2003b: 254）、その後の2008年のいわゆる「リーマン・ショック」の影響のなかで、2010年に倒産する。

上記のその「イスラム系起業家」の「人物」との「フィールド」でのインタビューは、1999-2001年と、2012年の数度に渡って、東京新宿コリアタウン（「B-通り」通称「イスラム・スポット」）で行われ、その過程の中で「フィールド」からの「場所」に関する「論点」を象徴する「風景」の変化や彼らの「場所への意味付け」、地元の日本人との「場所への意味付けをめぐるコンフリクト」といった「語りの方のための説得力のある事例と言説」が筆者の中に想起され、「日常的実践」と「場所-形成」との結合という「理論的世界」の意味を考えるひとつの要素となった。しかし、現場の「フィールド」からの「経験」を重要視する筆者にすれば、先述の「ブラジリアン・プラザ」の出来事は、「日常的実践」と「場所-形成」の結合を象徴する深化と拡大と「語りの方のための事例と言説」を暗示する「先行的」な現象であった。

### 3.2 「フィールド」からの「日常的実践」と「場所」との結合の「道筋」

#### ——新宿「コリアタウン」「B-通り（通称イスラム・スポット）」での「語りの方のための事例と言説」

筆者にとっての「日常的実践」と「場所」の結合（＝「日常的実践」と「場所-形成」に関する「論点」の「深化」と「拡大」）は、前述のように、「場所の意味付け」「場所の領域化」という「語りの方のための説得力のある事例と言説」をとおして現れた。この筆者の「フィールド」での「経験」のひとつは、新宿「コリアタウン」「B-通り（通称イスラム・スポット）」での「フィールドワーク」であり、その「語りの方の方法」は、後掲の3.3での、山口県「周防大島・沖家室」からの「布哇」への移民と、現在のN.Y.の「イースト・ビレッジ」での「フィールド」でのフィールドワークに繋がった。前者の「周防大島・沖家室」からの移民の話は、「古層的」な史資料と現在のインタビューとから構成されるが、それは「（下からの）トランスナショナリズム論」の「リアリティ」の、いわば、「初期トランスナショナリズム」論の例を得るため実施したものであり、もうひとつの「イースト・ビレッジ」でのフィールドワークは現在の「（下からの）トランスナショナリズム」の一例を得るためのものであるが、前者も後者も、結果としては、「日常的実践」と「場所-形成」に関する「深化」「拡大」に関する新たな「語りの方のための説得的な事例と言説」を提示した（その両方とも『共著』（広田・藤原, 2016）に掲載）。ここでの3.2では、新宿での「フィールドでの経験」について述べるが、この「フィールドでの経験」も、前述の群馬県大泉町での「フィールドワーク」での人物との10年を経て偶然的な新宿「B-通り（通称イスラム・スポット）」での「出会い」が影響した（広田・藤原, 2016: 161-200 [第6章]を参照）。前述のように筆者の新宿コリアタウンと「B-通り（通称イスラム・スポット）」の「フィールド」での「経験」は、1990年代初頭に始まった鶴見での「生き方」の多数性と拡がり確かめるための一環として、1994年から群馬県大泉町そして1999-2001年前後の群馬県境町でのイスラム系の「エスニック・ビジネス」に繋がった。そして、ここでのイスラム系起業家（インド国籍）の一人が、「境町」と「新宿百人町（コリアタウン）」の「B-通り（通称イスラム・スポット）」で、ハラール・フードの経営と同時に「I-モスク」を作り、管理をしている人であった（広田, 2003b: 273-276 [事例24]）。

特に、新宿「B-通り」における「フィールドワーク」



の初期の会話は、(主に筆者の目的が「エスニック・ビジネス」の「生き方」に注目していたため) ビジネスを中心とした「会話」が主であった。「[その起業家が] 新宿の百人町をそのビジネスの中心に選んだのは、ここが外国人の集中する地域だからである。『ここは国際電話カードのマーケットだし、大きな市場だから』というのがその理由である」と筆者は記述した(広田, 2003b: 274)。さらに、「K・N氏が境町を選んだ理由は、『境町に、モスクができて人が集まるから』である」と筆者は記述した(広田, 2003: 275)。ただ、その「会話」のなかには、家族への思いも記述されており(広田, 2003b: 274-275)、それはいわば「(下からの) トランスナショナルリズム」の「説得的な語り」にも通じるものであった。

次にこの「イスラム系起業家」に話を聞いたのは2012年である。筆者のこのフィールドワークは、当時の所属大学での「社会調査法」の授業として、準備のために筆者だけが実施したフィールドワークと、後に履修生と実施したインタビューから得た。調査は、いわゆる「新宿コリアタウン」を、通称「職安通り沿い」と、当時「通称イケメン通り」と呼ばれた「細街路」、「B-通り(通称イスラム・スポット)」を対象に実施した(広田研究室報告書, 2013)<sup>2)</sup>。10年ほどの時間を経て筆者が実施した「会話」と「場所」の変化としては、ひとつには当該の「商店会(商店会長との会話)」と「イスラム系起業家」の「場所の意味付け」あるいは「場所感覚」の違いと、「場所」の「風景」の変化が挙げられた。筆者が「B-通り(イスラム・スポット)」化について「商店会(商店会長)と「イスラム系起業家」に関する印象は、一言で言えば、「乖離」に尽きた(広田研究室報告書, 2013)。前述の「イスラム系起業家」の「場所」への「語り」については、次の「変化」が印象であった。同氏は、「私は、群馬県とここを往還している。ここは商売の場所だが、モスクを作ったし、お祈りの場所でもある。だから自分にとっては[ここは] 特別な『場所』だ(広田研究室報告書, 2013: 47)。筆者からすればこの会話には、以前の「場所」を「エスニック・ビジネス」の「場所」だけではなく、それを、文化的、宗教的、社会的、家族的その他の「生活の場所」として、「受け身的(passive)」というよりも、「構成主義的(constitutive)」に関わっている彼らの「生き方」を見受けた。それは、約10年を隔てた「会話」についての筆者なりの印象かもしれないが、彼らの「語り」としては、「風景」を「領域化」という「語り」の方法のための

説得的事例と言説」があった。筆者は「風景」の変化に関する印象を、『共著』(広田・藤原, 2016)の中で次のように記した。「たしかにハラール・フード店等を中心に日常的な集合はあるが、時に潮が引くように目に見える社会的集合は姿を消す。しかしその時点でも確かにそこには『イスラム・スポット』と呼びうるような、人々の『社会的凝集』を感じることができる」「おそらくそれはそこにそうした『領域』を象徴する何かが存在すると筆者は考える・・・移動者がそれぞれの『場所』に、その『領域』を象徴するどのような『言説』や『記号』を付与している」(広田・藤原, 2016: 166)。ちなみに、この「風景」の変化と「場所の領域化」の問題について、後に、都市社会学者阪口毅氏は彼自身の著書(阪口, 2022)のなかで(無論同氏は「都市エスニシティ論」者ではないが)、「制度的場所」の他にも「象徴的な場所」という次元の存在を論じたが(阪口, 2022: 19 etc)、筆者は『共著』(広田・藤原, 2016)のなかで、人類学者A・グプタ(A. Gupta)とJ・ファーガソン(J. Ferguson)の主張を参考に「筆者は場所の本質論からいったん離れて、『場所-形成(place-making)』という概念を、本書では呈示したい・・・本書のテーマである『移民/エスニシティ』あるいは「異質な人々」が、定住地での人々と惹き起こす『場所の獲得』『場所のアイデンティティの政治学』の過程を解釈するためには、『場所』の本質論ではなく、むしろ彼らの移動者たちによる『解体と再構成』のなかで、行為者のアイデンティティの在処や『記憶の想像的利用』といったことが解釈の重要なポイントになる」として「日常実践」と「場所」の「深化」と「拡大」のもうひとつの「論点」として提出した(広田・藤原, 2016: 38-39)。ちなみに、『共著』(広田・藤原, 2016)には、都市社会学者藤原法子氏の手で、群馬県大泉町での「移民1.5世代」の「生き方」に関する「日常生活の実践」における「深化」と「拡大」について同書に掲載されているが(広田・藤原, 2016: 144-160 [同氏記述])、前述の群馬県大泉町での(過去の)「ブラジリアン・プラザ」についても、当時筆者はすぐにはその意味や「語り」の方法のための事例と言説」としての重要性に気付かなかったが、ブラジル国旗を彩る黄色や緑の彩色の「記号」は、もちろん彼らの「エスニック・コミュニティ」の象徴であるが、同時にそれは、より広い意味での異質性を含む「日常生活一般」のなかでの実践」とでも言えるような「行為体」の「場所の意味付け」の「自己呈示」という彼らの「日常

的实践」や「領域化」を象徴的に表していた。「生き方」を、「日常実践」と「場所-形成」の結合として考えようとする筆者にすれば、この「風景」と「場所の意味化」は「制度化された」あるいは「既存の秩序」のなかに、日常生活のなかでの「多義的な意味」をもつ「場所-形成」という「論点」を呈示していたと考える。それは「日常生活」のなかでの「自己呈示」の实践を表していた。もちろんそこには、日常の「場所の忌避」や「場所の衝突」「連結/節合」を含む「包摂/排除」と、「通念性」と「意味」の新たな「論点」があった。ちなみに筆者は、日本国籍でありながら「帰還移民」の文化を持ち、いわば、「エスニシティ化された他者」を指摘した(広田・藤原, 2016: 137-140)。大泉町の「ブラジリアン・プラザ」が倒産しても、異質な社会に独自の「自己呈示の場所」を創ろうとする動向は、2006年の「大泉観光協会」の設立(広田・藤原, 2016: 133-137)、大泉への移民第2世代が中心となる「ブラジル・ライブ」の展開、そして「インタナショナル・タウン」の意味付けと大泉町の地域政治の展開(広田・藤原, 2016: 117-143)のなかで、「自己呈示」や「演出すること」(広田・藤原, 2016: 135-136)は今なお進行中である。

新宿や大泉町での「論点」は、筆者としては、次の3.3での、山口県周防大島・沖家室からの移民の歴史的、現在の「フィールド」と、現在のN.Y.での「イースト・ビレッジ」での「短いインタビュー」での「主体」と「場所-形成」に関する「論点」に関わると考える。

### 3.3 「日常実践」と「場所-形成」から見る「主体」に関する「語りの方法のための事例と言説」による「理論的世界」の「深化」と「拡大」

#### ——「沖家室」「布哇」と「イースト・ビレッジ」での「フィールド」で

筆者の「都市エスニシティ論」の、「越境」の時代における人の「生き方」を、「日常実践」と「場所-形成」に焦点をあわせ、そこで気付く「語りの方法のための事例と言説」をとおして「理論的世界」の「深化」と「拡大」を辿ってきたこの3の最後に、『共著』(広田・藤原, 2016)に所収の「周防大島・沖家室」からの日本人の「初期トランスナショナリズム」の「日常実践」と「場所-形成」、そしてこれも日本人の現在のニューヨーク「イースト・ビレッジ」での、「移民起業者のある家族」の「日常実践」や「場所-形成」や「主体性」「アイデンティティ」と、そこから「問いかけられた問

い」や「理論的世界」の「論点」を抜粋しておきたい。筆者の「都市エスニシティ論」は、鶴見から群馬県大泉町、東京新宿大久保「通称コリアタウン」や「B-通り(通称イスラム・スポット)」に至るまで、いわゆる「越境者-エスニシティ」や「共振者たち」の「日常実践」と「場所-形成」の「生き方」の「論点」を見てきた。3.3での特に「沖家室」からの「初期トランスナショナリズム」と、現在のN.Y.の「イースト・ビレッジ」での「日常実践」「場所-形成」そしてその「主体性」は、筆者の「都市エスニシティ論」の「理論的世界」の「物語」や「語り」や「問い」をどのように「深化」「拡大」したかがここでの「論点」である。

「沖家室」の「初期トランスナショナリズム」の「日常実践」と「場所-形成」は、その位相を明治末から大正、昭和という「近現代」に移し、そして、現在の「イースト・ビレッジ」の場合は、それらを日本人自身の「越境の場所」での「日常実践」と「場所-形成」を対象としている。「初期トランスナショナリズム」という発想それじたいは、R・ウエダ(R. Ueda)の短い論文の“An Early Transnationalism?”(P. Levitt and M.C. Water (eds.), 2002, *The Changing Face of Home*, Russell Sage に所収)に示唆を受けた。同論文は、第二次大戦に近づきつつある時代、「故国」日本との交流が次第に厳しくなっていた時代、布哇ホノルルの「推移地帯」「ア・アラ街」(現在は存在しない)で日本人移民の「商店会」(「アアラ・マーケット」)を1918年(大正7年)に設立し、移民としての「生き方」の「記憶」や「想像」をとおして「日本のエスニック・タウン」という「場所-形成」について説明したものである。そしてこの時代の「布哇」そして「アアラ・マーケット」には、日本の「官約移民」(明治18年)の第一期参加者である山口県周防大島(属島・沖家室も含む)出身者も——後述する『共著』(広田・藤原, 2016)で筆者が描いたある人物の場合には、明治41年に17歳でホノルルに渡航し、大正、昭和を「生き抜いた」人である——「沖家室」も関わっていた。それは、筆者にとって、「(下からの)トランスナショナリズム」の時代を越えて近現代におけるもとの「日常実践」と「場所-形成」に関する「古層なるもの」(この言葉は奥田道大の表現)(奥田, 2004: 99)を考えるとという「論点」がある。無論、それよりは先立つ時代(日露戦争1904-1905年)当時には、米国東部ニューヨークには、領事館職員や企業の駐在員、医療従事者たちからなるいわば当時の「(上からの)トランスナショナリズム」に属する人々による「紐



育日本人会」や「日の出倶楽部」といったアソシエーションや「日米週報」といった「新聞」、「教会」、「旅館」、「商店」そして「移民街」も含めた「社会世界」がつくられていた（紐育日本人会編1, 1984: 383etc; 広田・藤原, 2016: 93注を参照）。ただ、本稿3.3で後述する、現在の「イースト・ビレッジ」での「移住起業家のある家族」へのフィールドワークは、上記の「紐育日本人会」とは、系譜的には、その「出発点」を同じとするが、実際には、戦後発足した「ニューヨーク日系人会」の厚意をとおして実施された。共著者の藤原法子氏によればこの「ニューヨーク日系人会」は、「1907年に日本人墓地の購入および・・・相互扶助のために設立された『日本人共済会』に端を発するが戦争で解体されるが、「戦後、日本への支援を目的に1946年には『日本救援準備委員会』として発足し」、1950年に「アメリカ政府による活動停止命令が解かれた後、『ニューヨーク日系人会』として発足し、現在に続いている」組織である（広田・藤原, 2016: 203-204）。本稿での3.3の「イースト・ビレッジ」での「移住起業家のある家族」は、この現在の「ニューヨーク日系人会」の重要な役割を果たしていた。

初めに言えば筆者の「周防大島・沖家室」のフィールドワークから得られたここでの「理論的世界」の「語り」の方法のための事例と言説」としては、日本人の越境の「初期トランスナショナリズム」の「日常的実践」と「場所-形成」ないしは「場所の獲得」の「適応力の高さとコミュニティ創造力（想像力）の高さ、及び『場所』をめぐる獲得の強さ」や「初期トランスナショナリズム」の「繋がり」の強さ（広田・藤原, 2016: 90）、そして「移動の記憶」「記憶による場所」（特に『共著』での藤原担当章: 96-116参照）がある。詳しくは『共著』（広田・藤原, 2016）を参照して頂きたいが、この「フィールド」からの「経験」をまとめるなら、1）「沖家室」は、明治、大正、昭和と「瀬戸内海の釣り漁の島」（森本・須藤・新山, 2006: 15-33）として、対馬（浅藻）、朝鮮、濟州島、台湾、布哇ホノルル・ヒロ、そしてブラジル島に移住漁業者を排出したこと（広田・藤原, 2016）、2）大正10年の国勢調査によれば人口自体は1,812人と少ないが（広田・藤原, 2016: 70）、漁業の中心地と同時に商業の中心地でもあり、物資の移動、情報の「結節点」として「都市的世界」との繋がりをもっていたこと（広田・藤原, 2016: 62etc）、3）「（下からの）トランスナショナリズム」という点で言えば、島居住者と移住者との繋がり」の強さは、国内外に出郷した

人々の消息や親睦のための「会誌」である『雑誌かむろ』（泊清寺・新山編, 2001; 広田・藤原, 2016: 69-74参照）や、現在でも（筆者らの本書刊行当時）、「東京かむろ会」、「関西かむろ会」、「広島かむろ会」、「布哇かむろ会」（布哇かむろ会は現在では廃止）等の「郷友会」を通じて、当該居住者からの「町内会」費の納入や各戸の管理が維持されている点にも「記憶の場所」としての「沖家室」の一面が表れている（広田・藤原, 2016: 64）。

「沖家室」の移住者の「日常的実践」と、彼らが関わった「ア・アラ街」（「アアラ・マーケット」）の設立に象徴される（R. Uedaの）「初期トランスナショナリズム」については、前述のように、明治41年に17歳で布哇に移住したある人物の『自伝』（大谷, 1971）と、その家族で現在でも漁業会社や「魚競り市場」を営んでいる人へのインタビューをとおして筆者がその「生き方」に筆者なりの「日常的実践」と「場所-形成」を見た。簡潔に言えば彼の「日常的実践」と「場所-形成」は、1）若干16歳で、雑誌『少年世界』を取り寄せ、帰還者に移住の世界を聞き、当時移民を奨励していた「力行会」に手紙で問い合わせをし、2）ホノルルでも、ある「移民宿」をとおして、職業斡旋所でヤード・ボーイを見つけ、夜学である寺院で語学を学び、あるいは当時多様なエスニシティの集住しているカカアコの「小学校」でまた語学を習得し、前述の「ア・アラ街」で「アアラ・マーケット」が設立されると同時に「鮮魚店」を営み、戦後も、「ア・アラ街」がクリアランスされた後も、別の地域で「漁業会社」や「市場」を立ち上げ、現在もその家族がそれを継いでいる。筆者は、順路が創られていないところで、それを自ら乗り越えていくその「日常的実践」と「場所-形成」力を見た。なお、「ア・アラ街」についてはM・オキヒロ氏（M. Okiriro）の『編著書』によればを参照して頂きたい（Okiriro, eds, 2003）。ちなみに、「記憶と場所」に関連して次の藤原法子氏の考えも紹介しておきたい。藤原氏は、「担当章」（第3章）で「移民宿」について『「移民宿」とは、単なる宿泊施設ではない・・・それは国境を越える人びとの移動を支える『記憶』でもあり『装置』でもある』と指摘している（広田・藤原, 2016: 102）。「ア・アラ街」についての『記録』を編纂したM・オキヒロ氏は、ア・アラ街の映画館は、繋がり」が絶えた後の日本文化を追体験するための「場所」になったことを述べ、「ア・アラ街における劇場の歴史は古く、1900年にはすでに『旭館』、1907年には『ホノルル劇場』が、1920年には

『日本館』、1928年には『オアフ劇場』、1936年には『公園劇場』などが設立され、日本から多くの俳優、音楽団が呼ばれた」と述べている (Okihiro, 2003: 35)。前述のウエダは、ホノルルの「アアラ・パーク」について、ここは、戦争で交流を断たれた出身地日本と移動先のアメリカを繋いで生きようとする日本出身者の「記憶としての日本」を体験する象徴的な場所であったと指摘していると、筆者は書いた (広田・藤原, 2016: 91)。藤原法子氏も、これは、ここをとおして横浜の「移民宿」に関連して、『記憶としての移動』が『移民宿』という『装置』をとおして、さまざまに埋め込まれ、重ね合わされた場所が・・・『初期トランスナショナリズム』の風景でもある (広田・藤原, 2016: 101) と述べ、この「フィールド」からの経験として「移動の記憶の場所」を描いている。「記憶と場所」の「論点」は、周防大島・沖家室の「フィールド」から得られた筆者の「都市エスニシティ論」の「理論的世界」の「語りの方法のための事例と言説」として重要な指摘である。

「イースト・ビレッジ」での「移住企業家のある家族」の「日常実践」と「場所-形成」の「生き方」(とその主体性/アイデンティティ)の話に移動したい。

前述のように「初期トランスナショナリズム」の対象地として日本の「官約移民」の第一期の「周防大島・沖家室」からの布哇へのトランスナショナルな移動を設定していた時、既に筆者としては、米国東部ニューヨークでの「(下からの)トランスナショナリズム論」の象徴的な「場所」を探していた。それは、前述のように「紐育日本人会」の歴史やN.Y.市への日本からの「移民」の状況について調べていた (広田・藤原, 2016: 95)。N.Y.の「イースト・ビレッジ」に関心を向けた研究上の理由の中には、『拙著』(広田, 2003b)と同時期に出版された、奥田道大の著書『都市コミュニティの磁場—越境するエスニシティと21世紀都市社会学』(奥田, 2004)での「[現代の]エスニシティーズ・タウン型の事例は、大都市衰退地区の伝統型ムラ・・・のメタファーというよりも、都市コミュニティとしての意味創造的側面を持つ [傍点筆者]」(奥田, 2004: 200)という表現も、「イースト・ビレッジ」を含む「ロアー・イースト・サイド」をイメージしていた (奥田, 2004: 201etc)。今から見れば「(下からの)トランスナショナリズム論」の「場所」として、筆者の「都市エスニシティ論」を、現場から、「(下からの)トランスナショナリズム論」を介してどのような「リアリティ」ある「語りの方法」あるいは「都市エスノグラフィ—編集」(=研究の現実を、

どのような構成主義的に設定し、現実をどのように読むか、を表現する時の奥田道大の表現) (奥田, 2004: 201)には適切な「場所」であったかもしれない。

筆者らの『共著』(広田・藤原, 2016)における「イースト・ビレッジ」で出会った「移住起業家」の人物は、1970年代前半に、長い旅を経て同地に移住した人である。同氏の「放浪」は長く複雑であるが (広田・藤原, 2016: 219)、現在 (本書当時)、レストラン等の飲食店関係10店舗以上を経営し、その場所で、「ある種の駆け込み寺」(本人の言葉)になるような組織としてのセンターも経営している (広田・藤原, 2016: 220)。

ここで筆者が主張したい、「理論的世界」の「語り」の方法のための説得的な事例と言説は、特に、上記の移民一世としての人物の、アメリカで生まれた、いわば移民二世の「子息」(女性)の「日常実践」と「場所-形成」と「アイデンティティ (主体性)」である。移民一世の同氏の「日常実践」は、いわば、これまでの「移民-エスニシティ」としての「物語を産出する行為体」であるが、後者の「子息」の「日常実践」は、当地で生まれた「アメリカ国籍」を持ち、ある有名な「語学大学」を卒業した、「高学歴」で、父親の経営を共に支える「高所得」の若い経営者であるが、母語 (英語) のネイティブであるにもかかわらず、その両親が日本エスニシティの「移民二世」ということから、必要以上にアメリカ人としてのアイデンティティを獲得するための努力の「生き方」をしてきた。しかし、彼女の場合、アメリカで生まれた「日本人性」という「記憶の他者性」をあえて受け止め、この「日系人」が多いこの「場所」に、自らの「場所の意味付け」をすることで、「イースト・ビレッジ」という「場所」に、両親と同様に企業の経営者として、自分の「生きる」ための「意味創造的場所」を見出した。

筆者は、群馬県大泉町での、「N-学園」を経営している、ブラジルからの帰還者 (日本国籍) の、「(ブラジル人)としての「他者性としてのエスニシティ」を積極的に受け止めながら」、「エスニック・スクール」経営に打ち込んでいる人物と、上記のある「移民二世」の「生き方」はその立場は異なるが、特に国境を越えて移民・移住・移動の「包摂と排除」のなかで、「異質性認識」とおして「ひとつの生き方」を見る気がする。すなわち筆者にとっては、鶴見で気付いた「都市エスニシティ論」の「論点」のひとつである「越境者-エスニシティ」と「共振者」、「日常実践」を支える「異質性認識」の、周縁に居るか中心にいるか、階層に関わらず、

それは、現在の「日常実践」と「場所-形成」のひとつの「理論的世界」の「深化」と「拡大」の事例のひとつであると考えた。それは、「(上からの)トランスナショナルリズム」であろうが「(下からの)トランスナショナルリズム」であろうが、あるいは、「周縁からの思想」であろうが「中心からの思想」であろうが、それは、現在の「都市エスニシティ論」がその「問いかけ」を受け止め、人々の「日常生活の実践」というべき「深化」と「拡大」の現在の「論点」であり、筆者の「都市エスニシティ論」の今後ともその「物語を産出する行為体」の「生き方」を考えるべき筆者らの「論点」として考えたい。

前述のN.Y.の「イースト・ビレッジ」での「移住企業家のある家族の移住の第二世代」の「場所-形成」「日常生活の実践」や「主体/アイデンティティ」は、「ローア・イースト・サイド」に「どのようなレガシーが見られるか」を問うたさまざまな都市社会学、例えば、S・ズーキン(S. Zukin)やJ・L・アブールゴド(J.L. Abu-Lughod)はもちろん、日本の都市社会学奥田道大の言う「レガシー」(奥田, 2004: 281-284)や、「オーセンティシティ」の再読を含めて都市の「街」の変化と「受け継がれる気質」を論じた都市社会学者五十嵐泰正氏の研究指摘とも交差する(五十嵐, 2019: 228, 273 etc)。

さて、最後の4で筆者は、「越境」「境界」「異質性」の「生き方」を、「日常実践」と場所-形成に焦点をあてて、その「世界」を「語りの方法のための事例と言説」をもとに解説し、その生きる彼らの「理論的世界」の意味を、最後に考えてみたい。

#### 4. 「都市エスニシティ論」の「理論的世界」と「行為体-志向の都市理論」 —トランスナショナル・アーバニズム／ 行為体／主体／日常生活の実践／都市 エスノグラフィーの「語りの方法の事例 と言説」

前述のように、ここでの目的のために参照対象とする「行為体-志向の都市理論」もしくは「行為体-志向の都市研究と実践 (agency-oriented urban research and practice)」(Smith, 2001: 6)は、「(下からの)トランスナショナルリズム論」のひとつの中心的「理論」であり、一般的には「新自由主義グローバル化時代」とそれ以降、そして現在の越境のなかでの解体と再組織、動揺の時代

における「移動」「越境」「境界」「異質性」を生きる人びと(およびわれわれ自身)の「生き方」とその棲む「世界」の「理論的な意味」を、「日常生活」に沿ってより深く、その「理論」や「考え方」を考察するためのひとつの優れた研究であると筆者は考えている<sup>3)</sup>。特にその中心的な著書として筆者は、M・P・スミスの『*Transnational Urbanism* (トランスナショナル・アーバニズム)』(Smith, 2001) =以下、『本書』(Smith, 2001)と記載=に、筆者の「都市エスニシティ論」の「フィールド」からの「概念」や「語りの方法」や「考え方」を交差させ、筆者の(フィールドからの)「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を整理したい。筆者が『本書』(Smith, 2001)を、その新自由主義的グローバリゼーション時代の終焉と動揺と変動の中で改めて取り上げるには幾つもの理由がある。ひとつには1990年代の初期に筆者がグローバル化のなかで人の「生き方」の問題を「都市エスニシティ論」という「文脈」のなかで「越境者-エスニシティ」や「共振者たち」の「行為体」の意味やその「日常実践」や「場所」とその棲む「世界」の「意味」の「深化」「拡大」は、3で示したように、現在一層、リアリティや緊急性をもっている。そして、それを知るための(フィールドからの)「方法」の重要性を増している。筆者の「都市エスニシティ論」の「出発点」に、鶴見で出会った人々は、単純に、「日系ブラジル人の帰還移民」や「移動の労働者問題」や「マイノリティ」とは一括り出来ない、「越境者-エスニシティ」と呼ぶことの「理論的な意味」や、彼らの「行為体」としての「理論的な意味」、彼らの「日常実践」や「エスニック・ネットワーク」の「理論的な意味」、そして彼らが棲む「世界」の「理論的な意味」の重要性がますます拡大している。(エスノグラフィックな)「都市エスニシティ論」は、『拙著』(広田, 1997; 2003)から『共著』(広田・藤原, 2016)の研究過程において、鶴見から群馬県大泉町、新宿大久保・百人町の「コリアタウン」や「イスラム・スポット」での「場所の意味付け」、そして「官営移民」の出発点の地「周防大島・沖家室」からの布哇や台湾、南米への「初期トランスナショナルリズム」(Ueda, 2002)の「古層としての事例と言説」、そして、現在のある家族へのN.Y.のイースト・ビレッジでの「移民第二世代」のネイティブで、高学歴で、高所得の「日常実践」と「場所-形成」と「主体」をめぐる筆者らの「小さなエスノグラフィー」からの「物語の産出」と「語りのための事例と言説」を経由して、(後述するが)「日常実践」というよりは「日常生



活の実践」の問題へと「深化」「拡大」してきたこともある。それをどのように「理論的」に考えるか、そして、さらにこの「深化」「拡大」は、新たな「場所感覚」や「主体／アイデンティティ」に関する「新たな感覚」に基づく「場所」での「フィールドからの理論」（＝エスノグラフィックな研究や考察）を、より展開する必要がある。筆者としては、「フィールド」で出会った人々の「存在」や「経験」を、既存の「ローカルの」で、ヒエラルキー的な構造のどこかに画一的に「位置付けて」事足りてしまうのではなく、人々にとっての「意味のある問題」として呈示する「理論」や「考え方」を、この「行為体-志向の都市理論」に「示唆」を受けたい。そして、そこに、これまでの筆者の「フィールド」からの「論点」の意味を考えてみたい。それは、「都市エスニシティ論」だけではなく、現在の都市社会学の「理論」にとっても意味を持つと筆者は考える。「越境者-エスニシティ」や「共振者」（＝われわれ）の棲む「（下からの）トランスナショナリズム論」について筆者は、バッシュ・グリッター・シラー・スザントン・ブランクによる著書（Basch, Glick-Schiller, Szanton Blanc, 1994）やスミス・ガルニゾの著書（Smith and Guarnizo, 1998）等を早い段階から紹介してきた（広田, 2003a；広田, 2003b；広田・藤原, 2016etc）。だが、都市エスニシティ論の領域においてであっても、これらの「（下からの）トランスナショナリズム」の「理論的な意味」については、残念ながら、その「言葉」だけが先行し、特に筆者の「都市エスニシティ論」との深い「理論的な意味」についての説明が足りなかったという筆者自身の反省もある。

そこで4では、筆者の「都市エスニシティ論」の「フィールドからの理論」（＝エスノグラフィックな過程）のなかで筆者が提起した「越境者-エスニシティ」「行為体」「日常実践」「場所-形成」「越境して棲む世界」といった諸「概念」や「論点」を、上記の「行為体-志向の都市理論」（Smith, 2001:6）を参考に、その「意味」を改めて深めてみる。筆者らにとっては、特に『本書』（Smith, 2001）の「理論」や「考え方」は、「新自由主義的なグローバリゼーション（批判）の時代」の影響を引きずってはいないが、今なお、『本書』（Smith, 2001）の「リアリティ」は褪せていることはないと筆者は考えている。もちろん本稿では、『本書』（Smith, 2001）の「あらすじ」をまとめて提示することはできないが、前述のように、筆者の『拙著』（広田, 1997；2003）から『共著』（広田・藤原, 2016）そして「前稿」

（広田, 2022b）に関わる「論点」の限りで、その「意味」を提示したい。

筆者の注目する『本書』（Smith, 2001）の「理論的な意味」の順番としては、この『本書』（Smith, 2001）に従いながら、まず、「行為体」の「理論的な意味」を考えるための「前提」として、第一に筆者は、「ローカル」や「国家」や「グローバル」に関する、「都市分析を枠付けてきた近代主義的方法」における「普遍対特殊」「経済対文化」といった「二項対立」的な「考え方」を、別の「連結／節合」を探るための「考え方」、すなわち「（下からの）トランスナショナリズム論」の基本的な「考え方」に触れたい。このなかには、『本書』（Smith, 2001）の「主題」でもある「トランスナショナル・アーバニズム論」の基本的な「理論」や「考え方」だけではなく、「ローカル」を「限定的なもの」とするような「ローカルのコミュニティリアン的な語り」（Smith, 2001:110）や、「場所」の本質論に関する「語り」を、オールタナティブな「場所概念」すなわち「場所-形成」論等の「語りの方法」に「転位」するきっかけとしての「連結／節合」に関する「考え方」や、そのための重要な「契機」がある。第二として筆者は、「都市エスニシティ論」にとって最も重要な『本書』の「理論」「考え方」としての「行為体（“Agency”）」の問題に触れる。この「理論」や「考え方」のなかには、筆者にとっては重要な「日常実践」の意味の「深化」「拡大」の問題や、これをさらに展開するための「文脈」と「偶発性」に関する「考え方」、そして「都市エスノグラフィックの意味」や「語りの方法」に関する、都市社会学にますます重要になる「考え方」が含まれる。『本書』（Smith, 2001）の「論点」や「考え方」としての「行為体-志向の都市理論」の根底を支える「社会学構築主義」についても若干触れる。

#### 4.1 「都市エスニシティ論」の「語りの方法のための事例と言説」に関わる「理論的世界」（1）

——「（下からの）トランスナショナリズム論」「トランスナショナル・アーバニズム論」「ローカルのコミュニティリアン的な語り」「場所」「偶発性」

「越境者-エスニシティ」と「共振者たち」に関わった筆者において（本人が移動しない場合も含めて）、われわれが棲む「世界」は、『本書』（Smith, 2001）での「行為体-志向の都市理論」の「考え方」から、どのような「理論的世界」が提起されるか、その「意味」はどのように検討されるのか、から始めたい。「（下からの）ト

ランスナショナリズム」論および「トランスナショナル・アーバニズム」論に関する「考え方」およびその背景の「哲学」的世界から入りたい。

筆者の「都市エスニシティ論」からすれば、『本書』(Smith, 2001)での「(下からの)トランスナショナリズム論」も「トランスナショナル・アーバニズム論」もその「考え方」は、「厳密な意味での地理学的なメタファーというよりは、文化的、社会的なもの」(Smith, 2001: 5)ということ、筆者はまず確認したい。『本書』(Smith, 2001)の「考え方」「メタファー」には、国境を越える人間や文化や政治や社会の「流れ」が提示する「経済と文化との二項対立 [の乗り越え (筆者)]」(Smith, 2001: 2)や「グローバリゼーション対ローカルの二項対立 [の否定 (筆者)]」(Smith, 2001: 2)といった「思想」が含まれており、そのなかでの「行為体」「主体」「実践」「場所の文化的意味の抗争」や(Smith, 2001: 5; Smith, 2001: 113-114etc)、「場所と文化の学問的な融合」(Smith, 2001: 110)やその「文脈」等々の「連結／節合の重ね合わせ (重合)」、およびこうした問題を研究する時の、(都市的)社会学の方法論としての「エスノグラフィー」に関する、社会的、文化的、政治的な「考え方」に焦点を当てる議論が内在している。筆者としては、それをまずこの「前提」を確認することで、特に、『本書』(Smith, 2001)での『「グローバリゼーション」』と『「トランスナショナリズム」』の概念を明確に区別する」(Smith, 2001: 3)ことの再認となる。

前述のように『本書』(Smith, 2001)では、文化人類学者のマイケル・カーニー (Michael Kearney) の言葉を引用し、「グローバリゼーション論」と「トランスナショナリズム論」とでは、「主要仮説」が異なる、という問題から入っている (Smith, 2001: 3)。特に『本書』(Smith, 2001)の主張は、「国家」との関係において、「グローバリゼーションは特定の国家的領域からの大幅な脱中心化」に力点がおかれる傾向があるが (Smith, 2001: 3)、「(下からの)トランスナショナリズム論」は、「トランスナショナルな社会関係を、時に境界を越えることはあっても、主には、国民国家に繋ぎ留められたものとして描写する」ことを主張している (Smith, 2001: 3)。特に前述のバッシュ、グリッシャー、スザントン・ブランクの著書を引用し『本書』(Smith, 2001)は、「[国家とトランスナショナリズムとは]互いに共通する構成要素をもち」(Bash, Glick-Schiller and Szanton-Blanc, 1994etc=Smith, 2001: 3)、互いに「排

他的な存在」ではなく、特に『本書』(Smith, 2001)では、文化人類学者のルイザ・シェイン (Louisa Schein) の主張を借りて、特に「国民国家とトランスナショナリズムとは互いに重なり合い、網の中で絡み合い、互いにいたるところで構成されるもの」として考えられると指摘する (Smith, 2001: 4)。さらに『本書』(Smith, 2001)の著者は、A・ハーシュマン (Alert Hirschman) の言葉を用いて、「(下からの)トランスナショナリズム」は、時に「出口選択 (exit option)」(Smith, 2001: 4)を持つ社会的ネットワークであり、ある意味で、その「トランスナショナル移民の社会的ネットワークは、国境を越えて幾つかのローカリティを結び付ける伝達的活動の主要な回路のひとつを構成し、地域の全域にわたるトランスローカルな紐帯を構成している」と指摘する (Smith, 2001: 4)。

『本書』(Smith, 2001)の著者が、「(下からの)トランスナショナリズム」と「グローバリゼーション論」とは「主要仮説」において異なるという引用をわざわざ挙げたもうひとつの理由は、「(下からの)トランスナショナリズム論」や「トランスナショナル・アーバニズム」を「メタファー」として理解することによってわれわれは、その背景にある、「都市分析を枠付ける近代主義的方法 (modernist way of framing urban analysis)」(Smith, 2001: 2)における(「普遍対特殊」「経済対文化」「グローバル対ローカル」等の)「二項対立」の歴史をどう考えるか、という問題にぶつかるからである (Smith, 2001: 2)。『本書』(Smith, 2001)にすれば、この「二項対立」こそが、「ローカルを限定化された場所」として矮小化する根本的な「語り」「言説」を生み出すからである。『本書』(Smith, 2001)の著者は、「『グローバル』対『ローカル』の問題は、特定の時代の特殊な社会的諸力に適應し、展開する、言説的および実践的に構成された『立場性』に依存する」という「考え方」をわれわれはそれをどう理解するかが問題であると主張する (Smith, 2001: 2)。

ただし『本書』(Smith, 2001)の著者は、上記の「二項対立」を、無理やりに、そして単純に「転覆」すれば事足りると考えているわけではない。むしろ、ここでは多様な「連結／節合」の可能性を探ることにポイントがある、と筆者は考える。実際、この「言説的および実践的に構成された立場性」を「転位」しようとするために『本書』(Smith, 2001)は、全体をとおして、「日常生活の実践」や「場所-形成」の「政治」や「ローカルとコミュニティ」や「(下からの)トランスナショナリズム」

や「トランスナショナル・アーバニズム」概念の理解と、「エスノグラフィック」な方法論あるいは「語りの方法のための説得力のある事例と言説」の問題もそこに関連すると考える。

それでは、「(下からの) トランスナショナルリズム」の「考え方」および、『本書』(Smith, 2001)の「トランスナショナル・アーバニズム」とはどのような「理論的世界」「メタファー」なのか。『本書』(Smith, 2001)によれば、「トランスナショナル・アーバニズム」とは、その「(下からの) トランスナショナルリズム」のなかでも特に次のような「様相」を示す「言説的および実践的」な「理論的世界」として呈示される。すなわち『本書』(Smith, 2001)では、その説明のために、あるふたつの「連結／節合 (articulation)」の例を出しながらそれを説明する。すなわちその事例のひとつは、「トランスナショナルな社会的行為者が、物質的な結合を、トランスナショナルなコミュニケーション的回路のなかのある特定の幾つかの都市の社会経済学的な機会や政治的な構造あるいは文化的な実践と結びつける」「連結／節合」の仕方 (Smith, 2001: 5) と、もうひとつとして、「トランスナショナルな社会行為者たちが、諸都市の文化に歴史的にも結びつきを持ち、社会的な実践やテクノロジーや象徴や国際的な認識の回路のなかで、それぞれが、同時的にあるいは間接的に巻き込まれ、コミュニケーションと移動の進んだ手段を利用することでトランスナショナルな結合を維持している」連結／節合の例を挙げ (Smith, 2001: 5)、『本書』(Smith, 2001)では、この後者の「連結／節合」の仕方を「トランスナショナル・アーバニズム」の「言説と実践の理論的世界」として定義する。『本書』(Smith, 2001)の著者は、「この用語をもって、交差しながら動く、トランスナショナルなコミュニケーション回路を表徴するひとつとして」、さらに、「特定の時代の特定の場所における『出会い (come together)』と、場所形成をめぐる政治的抗争の社会的構成や個人や集団や国家やトランスナショナルなアイデンティティ、そしてそれに付随する領域を表徴する」ために、著者は「トランスナショナル・アーバニズム」という概念を使う、と主張する (Smith, 2001: 5)。そして『本書』(Smith, 2001)の著者は、上述の国境を越える繋がりに関して「『トランスナショナル・アーバニズム』というメタファーを使うのは・・・特に、連結／節合を示唆するためである」と述べている (Smith, 2001: 5)。

上述の「特定の時代の特定の場所における『出会い

(come together)』と、場所形成をめぐる政治的抗争の社会的構成や個人や集団や国家やトランスナショナルなアイデンティティ、そしてそれに付随する領域を表徴する」といった表現については、後に、D・マッシー (Dreen Massey) の引用の箇所や「行為体」に関する箇所でも、より具体的な事例を用いて説明されるが、ここでは、上記の抽象的な説明を補足する「挿話事例」をふたつだけ挙げておきたい。『本書』(Smith, 2001)のなかで著者は「挿話事例」のひとつとして、きわめて実際に起きた事件として、N.Y.で、警官によって自宅の前で銃撃された移民大道商人の「出来事」が、同じ移民のネットワークや市民抵抗団体や、その他の普通の例えばカリフォルニアの空港のタクシーの移民等々を通じて、あつというまに、境界を越えて伝達され、同時的に異なる「人種」や「階層」を越えて、その大道商人のアフリカからの彼の母親、トランスナショナルな行為者-過激派、穏健的な政治家、牧師、メディア、政敵のN.Y.市長らによる、人権的、かつ政治的に異なる人々の「集まり」が出来上がったことを挙げている (Smith, 2001: 109-110)、そしてふたつ目としては、いわゆる「アフリカの水を汲む女性」に関する「多様な解釈」を例として挙げている (Smith, 2001: 109)。

『本書』(Smith, 2001)で著者が、こうした「集まり」や「象徴的な事例や言説」を使用するのは、「一時的な縫合 (temporarily sutured)」やその「偶発性 (contingency)」の「言説と実践」が、「(下からの) トランスナショナルリズム論」や「トランスナショナル・アーバニズム」においては、連結／節合的の「出来事」や、「場所と文化の学問的な融合」の必要性 (Smith, 2001: 110) と、「場所の文化的意味の抗争」(Smith, 2001: 113-114) といったあらゆる「考え方」には必要であることを主張するため、そして、この領域における研究としてはまだ未成熟ではあるが今後ますます重要なテーマや都市エスノグラフィーに必要となることを、意図しており (Smith, 2001: 113)、そしてそれは、われわれが棲むこうした「理論的世界」を、「トランスナショナル・アーバニズム」という概念をとおして、現在の今を生きる「行為体」やその「主体」の「意味」を象徴化し、「理論化」するために必要であると考ええるからである (Smith, 2001: 134)。この概念は、筆者の「都市エスニシティ論」(と「フィールド」からの研究=都市エスノグラフィーにとって) 重要な「越境者-エスニシティ」や(自分は移動しないかもしれない)「共振者たち」の「言説と実践」を理解するために背景に置く必要がある。



筆者の（フィールドからの）「都市エスニシティ論」においても、この「偶発性」「一時的縫合」、そして現在の「抗争」に関する「理論」「考え方」は、例えば鶴見の「越境者-エスニシティ」と「共振者たち」「エスニック・ネットワーク」や「日常実践」を、「小さな場所」で起きながら、それをより広い範囲での「語り」の方法のための説得的な事例と言説」として、あるいは「(下からの)トランスナショナリズム」として考えるための「理論」「考え方」であると同時に、それは、日本の「鶴見」等の「場所」から「(下からの)トランスナショナリズム論」に提起するひとつの「事例」や「論点」でもあり、筆者は考える。実際この「挿話」や「事例」は、「鶴見」で筆者の「都市エスニシティ論」が見た「経験」と共通して、それらの出来事を「未発の運動」として同時期に、それも同じ「フィールド」の中で論じた都市社会学者新原道信氏の言葉をも想起させる（新原, 1995）。それは、鶴見等から発信できる「語り」の方法のための事例や言説」でもあると筆者は考える。

『本書』(Smith, 2001)のこの「事例」には、「トランスナショナリズム」の「リアリティ」を、地理学および文化論的に「ローカル」を「限定化」「矮小化」しようとする「思想」、いわば『本書』(Smith, 2001)によれば、「ローカルのコミュニタリアン的な語り (localized communitarian narratives)」(Smith, 2001: 110)を「転位」する問題も付随する。筆者の「都市エスニシティ論」においても、特に、『共著』(広田・藤原, 2016)では、この「ローカル」や「ローカルの境界」という問題は、「場所」および「場所-形成」に関する問題として出現した（本稿3を参照）。そしてさらに、この問題は、前述のように「小さな場所」での「エスノグラフィックな研究」あるいは筆者の言葉で言えば「フィールド」からの「越境者-エスニシティ」や「共振者たち」の、「境界」「異質性」に直面する人びとからの「物語を産出する行為体」という言葉で筆者が提起した存在や、「場所への意味付け」同士の「紛争」(群馬県大泉町、新宿「B-通り (イスラム・スポット)»)といった、「ローカル」にかかわるエスノグラフィックな研究の問題にも関連する（＝後者の問題は4.2でも説明する）。

筆者にすれば『本書』(Smith, 2001)のこの「事例」や「メタファー」は、われわれの根底にある「ローカルのコミュニタリアン的な語り (localized communitarian narratives)」(Smith, 2001: 106)あるいは「ローカリティとコミュニティとの融合 (conflation of locality and

community)」(Smith, 2001: 110)の「メタファー」を、異なる「連結/節合」のために、「場所」の本質論から「場所-形成」の問題に「転位」することを求めている。『本書』(Smith, 2001)では、その、異なる「連結/節合」のために、つぎのような「考え方」が必要であると主張している。すなわち、「トランスナショナル・ネットワークじたいも、ローカルの根茎 (groundedness) に基づいて構成されている」ことを理解すること、そして、それと同時に、こうした上記の「重ね合わせ (conflation)」を理解するためには、「ネットワークを基礎とする政治生活の概念と、現在の都市政治が、いかに重合するかに関する、その連結/節合を明らかにすることの重要性を指摘する (Smith, 2001: 102)。

その「融合」を知るための方法として『本書』(Smith, 2001)では、まず、都市地理学者D・マッシーの言う「場所を流動性 (fluid) として見る」という「考え方」を提示している (Smith, 2001: 106)。「場所を流動性として見る」という意味は、「ローカルとコミュニティは、根茎内部は、必ずしもいつも同じように結合しているわけではない」という「考え方」を強調する表現であり、「ローカルのコミュニタリアン的な語り」を動かないものとして考える「考え方」に対して、別の「連結/節合」もあることを指摘するための表現である。すなわち『本書』(Smith, 2001)では、D・マッシーの論文を引用しながら、われわれは「異なる諸個人と諸社会的集団は、資本と文化の『グローバリゼーション』の流れに対して、それぞれさまざまな立場にあること」(Massey, 1993: 61=2002: 32-44; Smith, 2001: 107)、そのことによって、グローバル化と場所は、「他方、こうした流れと連結が、特定の時代の特定の場所において交差し、それぞれの場所に、独特のダイナミズムを与え、私たちに、[たとえば]『グローバル的』な場所という感覚や『進歩的』という場所の感覚 (sense of place) を抱かせる」と指摘する (Smith, 2001: 107)。この著者は、D・マッシーの論文 (Massey, 1993: 66=2002: 32-44) を引用し、「ローカリティのイメージの取得は、ある種の長期間-内部化された歴史もしくは沈殿している特徴からではなく、共-存在的 (co-presence) に集合する特殊な相互行為および現在のな連結/節合の『社会的関係や社会的プロセスや経験そして理解』から得られるのだが、『しかし、関係性の大部分は、・・・その場所の瞬間的な、たまたまの定義というよりは、長いあいだの習慣に依存する [傍点筆者]』と指摘し (Smith, 2001: 107)、だからこそ『本書』(Smith, 2001)では、[われわれは]

「社会的関係と認識が交差するネットワークの瞬間的な連結／節合を理解する時、場所は単一なものではなく、多様で、互いに抗争的なアイデンティティにあるということ。そして、「場所-形成 (place-making)」は、紛争的で差異的で、時に、状況によって社会的に交渉的で、時には社会的な行為体によって敵対的にもなり、あるいは、そのネットワークのある部分は、局地的には拘束を受けても、他の部分の社会関係や意思疎通は地域や民族的な境界を越えて広がっていることもある。要するにマッシーは、・・・『本書』が述べているトランスナショナル・アーバニズムの概念にとっての鍵的な理論の構成要素を提起している」と主張する (Smith, 2001: 107)。そして、『本書』(Smith, 2001)の著者は、最後にD・マッシーの短いエスノグラフィーに触れながら (Massey, 1991a; 1993a=2002: 39-41) ——ここでのマッシーのエスノグラフィーは、ショッピング・センターでの、そこを通る様々な多数性の人々の、場所とのさまざまな関係や会話や記号化を描いている——、この場所に関する様々な関係や記号化や場所へのそれぞれの意味付けに関する短い参与観察もしくはエスノグラフィーを、「自らをめぐって固定的な境界を描くことなく、場所を『地図化』するための有効な方法である」と述べ、「これは、そのなかの社会関係が、場所の空間と記憶 (すなわち、時間) を拡大し、ある場所とストリートの流動性 (fluid) や、その多様性や多数性を把握するための有効な方法である」と述べる (Smith, 2001: 107)。

筆者においても、多様で多数性の意味を持つ「場所」での、「エスノグラフィー」あるいは「フィールド」からの研究の「意味」に関するこの『本書』(Smith, 2001)の「考え方」は、本稿の筆者の『拙著』(広田, 1997; 2003)での「日常の実践」や『共著』(広田・藤原, 2016)や本稿3での筆者の多様な「場所の意味付け」(と紛争)に関する「フィールド」からの「経験」や「言説」を理解する際の、有効な「理論的世界」の「考え方」である。そしてこれも同時に、3で筆者の「都市エスニシティ論」が、「新宿」や「N.Y.のイースト・ビレッジ」での「移住起業者の家族」の「第一次世代」と「第二次世代」との「主体／アイデンティティ」の相違や「場所への意味付け」を説明するときのひとつの「理論」「考え方」として考えることができる。そしてこれは、同時に、上記の筆者らの『共著』(広田・藤原, 2016)での「生き方」を説明すると同時に「トランスナショナルリズム論」への、筆者らが提起する「事例」「論

点」であると考えている。

だが『本書』(Smith, 2001)の著者は、上記のD・マッシーの論点を「(下からの)トランスナショナルリズム論」や「トランスナショナル・アーバニズム論」そのものを象徴する「考え方」と言いつつも、ある一点については、『本書』(Smith, 2001)の「主張」とは異なることを、指摘する。この点は筆者の「都市エスニシティ論」にとっても重要である。それは、このD・マッシーの「場所」に関する「考え方」が、「トランスナショナル・アーバニズム」のなかにいるわれわれにとっての「行為体」やその「主体」(越境も含めての)やその「連結／節合」を「固定化」してしまう危険性を持っていることである。その「危険性」に『本書』(Smith, 2001)は、次のように指摘する。「『マッシーは』グローバルなプロセスから断絶された被害者として、トランスナショナルな空間における『下からの』社会的な行為体として描いているが[傍点筆者]、結果としては「トランスナショナルな流れと場所とのダイナミックな結合」に関しては、あまり注目していない[傍点筆者]と述べ (Smith, 2001: 108)、[D・マッシーのように]かれらを「[下からの]現実をこのように象徴化することは、トランスナショナルな移動のヒエラルキー的構造の社会的規制や統制のシステムを、国家システムの底に、自律的に存在するかのように想定することになる[傍点筆者]という「危惧」を指摘する (Smith, 2001: 108)。そこで『本書』(Smith, 2001)では、現実の「(下からの)トランスナショナル・アーバニズム」の現在を想定するならば、[越境、移動]の拡大の現在の「跳躍的規模 (jumping scale)」(Smith, 2001: 109)を前提にするならば、われわれは、より複雑でまだ未知的領域に踏み込むことが必要であると主張する。

『本書』(Smith, 2001)の著者は、ここで、A・グプタ (Akhil Gupta) とJ・ファーガソン (James Ferguson) の「[トランスナショナルな時代における]場所と文化との学問的融合 (scholarly conflation of place and culture)」の重要性を指摘する (Smith, 2001: 110)。ちなみに、『本書』(Smith, 2001)の著者は、「ローカル的でコミュニタリアン的な語り」を回避するためには、「多くの境界-越境者 (border-crossers)、例えば、移民、亡命者、逃亡者、ディアスポラ」であるべきと述べ (Smith, 2001: 110)、「このような人々は、世界の中で地理的に広い距離を交差し、社会的なネットワークを結合する共-存在の状況を作りながら彼らの生き方を総合化

している」と述べる (Smith, 2001: 111)。ただし、もちろんこの人々においても、「境界-侵入的なプロセス」(Smith, 2001: 111) の過程で彼らも、「必然的に、包摂 (inclusion) と排除 (exclusion) の過程、そして『他者的なるもの (otherness)』の過程に直面する」と指摘している (Smith, 2001: 111)。そして、「例えば、構造的に外部的なるもの、あるいは『他者的なるもの』から成る社会的構成は、世界中のトランスナショナルな都市での1990年代をとおして噴出したエスニックおよび人種関係の対立などはその一部である」とも指摘する (Smith, 2001: 111)。

この指摘は、本稿3で筆者の「都市エスニシティ論」が、「大泉町での他者性を積極的に引き受ける主体」あるいは、「N.Y. のイースト・ビレッジでの第二世代のアイデンティティ」にとっての重要な「事例」の「理論的世界」の説明にもなる。ちなみに、後者の筆者の3の最後に載せた「イースト・ビレッジ」の「第二世代」は、高学歴、高所得、経営者に属する人々であり、たしかに「都市エスニシティ論」や、上記の人々の「主体」を、国家システムの「底辺に固定化」して考えることは、D・マッシーへの「危惧」と同様な「問題性」を提起する。まさに『本書』(Smith, 2001)の「考え方」は、当を得ており、「(下からの) トランスナショナリズム論」や移民を「最底辺の構造的な位置」に置くことの問題性を指摘している、と筆者は考える。その点においても筆者のフィールドからの「都市エスニシティ論」が指摘したように、「固定化」の危惧を避けるためには、筆者も、「場所と文化との学問的融合」が必要であると考える。

それならばこの『本書』の著者は、この困難な研究を「転位」するための可能性として、どのような「考え方」を提起しているか。この『本書』(Smith, 2001)では、異なる「連結/節合」を求めるには、「エスノグラフィー」の役割として、ふたつの方法があると著者は指摘する。ひとつは、「特定のローカリティが、特定の時代に巻き込まれた社会的空間との相互依存の特徴的文脈『の意味』を明らかにすること [傍点筆者]」であり (Smith, 2001: 112)、もうひとつは、「ローカリティを、政治的および歴史的なプロセスの、複雑で偶発的 (contingent) で抗争的な結果としてみること [傍点筆者]」のふたつである、と指摘する (Smith, 2001: 112)。そして、「エスノグラフィックな研究」としては、『本書』(Smith, 2001)の著者は、「政治的闘争」ないしは「差異の政治」を否定するというよりは、むしろそれを、そ

の「偶発的な結果の積み重ね」としての「文脈の意味」に注目することを提案する (Smith, 2001: 113)。ちなみに、『本書』(Smith, 2001)では、グプタとファーガソンが「場所としての空間の社会的構成の問題」に注目したときに彼らは、偶発性の問題に気が付くはず」と指摘するが (Smith, 2001: 113)、「空間的意味は、実践的、どのように確立されていくのか、誰が、空間の場所を形成するための権力を持つのか、だれが、それと抗争するのか、そして何が、この問題に関連するのか」(Smith, 2012: 113)に注目することが重要であると言い、さらに、P・ジャクソン (Peter Jackson) のいわば「遺産論争 (heritage debate)」や「歴史保存 (historic preservation)」に関する一連の詳細な事例研究の中に発見した、場所-形成の複雑な政治について挙げ (Jackson, 1991: 225; Smith, 2001: 114)、いわば「オーセンティックな文化」の問題に関連させて、その「表象の政治」の重要性を指摘している (Smith, 2001: 114)。ちなみにこの問題は、本稿3での五十嵐泰正氏の指摘とも、ある意味重なる。

筆者は、前述のような「1990年代をとおして噴出したエスニック」の時代に、日本の鶴見での「越境者-エスニシティ」と「共振者たち」との「日常実践」に出会い、その後、群馬県大泉町や東京新宿コリアタウンや「イスラム・スポット」やその「境界-侵入的なプロセス」での「包摂 (inclusion) と排除 (exclusion)」の過程や『他者的なるもの (otherness)』の過程に「フィールド」から「エスノグラフィー」を続け、さらに、「布哇」でのエスノグラフィーやN.Y.での家族の「場所-形成」や「場所の意味付け」の「小さなフィールドワーク」であっても、それを「経験」しながら (広田・藤原, 2016)、「場所-形成」の「表象の政治」や、それぞれの「場所の意味付け」の紛争を理解するために、著者の「場所-形成」と「表象の政治」の「文脈」の、「偶発性」や「一時的な縫合」も含めた「流れ」を見てきた。「都市エスニシティ論」の「フィールド」からの「エスノグラフィック」研究の重要性からするならば、『本書』(Smith, 2001)の以上の「考え方」は、ある程度、同意できることを主張したい。

#### 4.2 「都市エスニシティ論」の「語りの方法のための事例と言説」に関わる「理論的世界」(2) ——「行為体」「日常生活の実践」「主体」「文脈と偶発性」「エスノグラフィーの語りの方法」

最後に筆者は、『本書』(Smith, 2001)のもうひとつ



の「理論的世界」に入りたい。もともと筆者（広田）の「都市エスニシティ論」の出発点は、国境を越えて、鶴見に移動した日系ブラジル人と彼らと共振した人びと——彼らの「先住者」であれ、日本人であれ、他のエスニシティであれ——の、「越境の場所」での「生きかた」を「フィールド」から理解しようとしたところにある。筆者の「前稿」（広田、2022a）で整理したように、『拙著』（広田、1997；2003b）では、1）対象者を「越境者-エスニシティ」と「共振者たち」として理解し、2）彼ら同士の互いの「異質性認識」にもとづく「日常の実践」——M・ド-セルト-の言葉に「示唆」を受け、筆者としては「恵まれない条件のなかでそれを迂回したり乗り越えたりずらしたりする諸実践」と一応規定した（広田、1997；2003：303）——に目を向け、3）それが「異質性認識」の過程——P・ギルロイの言葉を借りて言えば「行為主体はどのようにして他者の中に自分自身を見・・・自分自身の中に他者を見るようになるか」（Gilroy, 1996=1998：147；広田、2022：63）——を「日常の実践」を支えるものとして、そういう「日常の実践」の過程を、エスノグラフィックに描き、4）その「フィールド」での「会話」や「実践」をとおして彼らが何を「問いかけているのか」を考え、そういう「行為体」を「物語を産出する行為体」として呼び、それを「（下からの）トランスナショナリズム」の「リアリティ」ある「世界」のなかでのその「存在」の「意味」を考えようとしてきた。したがって筆者の「都市エスニシティ論」の課題の中心は、常に、こうした「行為体」（われわれも含めて）と「（下からの）トランスナショナリズム論」の「リアリティ」ある「理論的世界」とは何か、そして、筆者の「都市エスニシティ論」が描く「日常の実践」や「主体」をどのような「理論的世界」として考えるのかということが問題であった。この4では、筆者の（フィールドからの）「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を呈示するため、「行為体-志向の都市理論（Agency-oriented Urban Theory）」（Smith, 2001：6）と「交差」させ、すなわち、そこからどのような「示唆」を受け、かつ「フィールド」からの筆者の「都市エスニシティ論」からはどのような「問題提起」をそれに提起できるかが、この4の課題であった。

4.2では、『本書』（Smith, 2001）の「トランスナショナル・アーバニズム論」で「対象となる人びと」は、「理論」的にはどのような人びととして措定され、彼らの「主体/アイデンティティ」を、どのように措定され

ているのかを見て行きたい。それに関して筆者の（フィールドからの）「都市エスニシティ論」はどのような「示唆」を受け、それにどのような「論点」を提起することができるか、が課題である。

『本書』（Smith, 2001）では、まず次のように述べている。「『本書』の」主要仮説は、多くの都市分析者が注目している資本主義的論理にもとづく蓄積戦略のアクター（actors）を、唯一絶対的なものとせず、それと同じように重要な存在として、都市的生活の中で構成される行為体（agencies in the constitution of urban life）に焦点を合わせること〔傍点筆者〕と著者は述べる（Smith, 2001：6）。『本書』（Smith, 2001）で「重要なことは、それほど強調されてはいなくとも、通常の男女の影響が——すなわち彼らの意識、意図、日常生活の実践（everyday practices）そしてその集合行動が——都市的生活の社会的構成に影響を及ぼしているから」と述べる（Smith, 2001：6）。加えて『本書』（Smith, 2001）では、「行為体（“agency”）を調査することが分かりやすい社会的過程だから、ではない。それは、人々の所与の意図や行為そして彼らの意味が、人間的経験に由来する、からである」と、その理由を付け加えている（Smith, 2001：6）。『本書』（Smith, 2001）が「トランスナショナル・アーバニズム」のなかでの「都市的生活の中で構成される行為体」に注目する理由として、「行為する主体（acting subjectivity）から意識する人間行為体（conscious human agency）になる過程には、簡単に整理できない偶発性（untidy contingencies）という困難さがあるにも拘わらず、行為体-志向の都市研究と実践（agency-oriented urban research）の探究に目を向けるのは、グローバル経済に意識過剰になるまで焦点を合わせるグローバル化への確固たる注目や・・・われわれの思考の外部にまるで先験的な「事物」（pre-given “thing”）として存在するもの、思考の外にあるかのような事物・・・〔そして〕都市の発展を十分に説明も質問することもなく、都市に住む人々の主体性を決定してしまう発展的論理を、具体化し、考察する必要があるからである〔傍点筆者〕」と述べる（Smith, 2001：6）。こうした「思い」は、筆者の（フィールドからの）「都市エスニシティ論」のように、「足元」にある「越境者-エスニシティ」や「共振者」や「物語を産出する行為体」を、「主体」としてあるいは「意識する人間行為体」として「フィールド」から始め、その「深化」や「拡大」の「意味」を積み重ねようとする立場にとってはこの考え方は重要である。現在の「エスノグラフィック」な、「フィールド」

からの研究にとっては、その社会的場所 (social location) にいる「行為体」とその「主体 (subject)」の意識 (sense) を、『本書』(Smith, 2001) で言うような「内的な緊張衝突を経験する存在」(Smith, 2001: 6) として研究することが必要になると筆者も考える。

特に、筆者の(フィールドからの)「都市エスニシティ論」は、「場所」を移動させ、「意識する人間行為体」同士の「出会い」の過程で、その「論点」は、より「深化」「拡大」する必要に迫られてきた。

ここで、「日常の実践」という言葉に目を向けて見ると、前述のように筆者の(フィールドからの)「都市エスニシティ論」も、鶴見その他の「場所」での「越境者-エスニシティ」と「共振者たち」の「異質性認識」や「日常の実践」「エスニック・ネットワーク」の「論点」を土台に、群馬県大泉町での「エスニック・ビジネス」や「エスニック・スクール」での「論点」、さらに新宿コリアタウンやいわゆる「B-通り(通称イスラム・スポット)」における「場所への意味付け」に関する「論点」、そしてN.Y.のイースト・ビレッジでの日本人家族のエスニック・ビジネスの人々の「場所」での「主体/アイデンティティ」に関わる「生き方」の「論点」を経験してきた。「越境者-エスニシティ」と「共振者たち」の「日常の実践」は、今、「日常生活の実践」へと「深化」「拡大」している。『本書』(Smith, 2001)の著者は、「日常の実践」という言葉については、「日常生活の実践 (practices of everyday life)」(Smith, 2001: 116) という言葉を使って、「トランスナショナル・アーバニズム」の「世界」での「意識する行為体」の「実践」に関する「理論」を提案している。『本書』(Smith, 2001)では、特にアンリ・ルフェーブル (Henri Lefebvre) とミシェル・ド・セルトー (M. de Certeau) を例にとり、「[[彼らは] 日常生活の活動に関わる普通のひとびとが、資本と国家が構成する抽象的な都市空間に挑戦する仕方で、都市空間を占有したり使用したりすることを描いてきた」(Smith, 2001: 116) と述べ、ルフェーブルが「都市への権利」という言葉を使って政治の変換を求めたのに対してド・セルトーの著書 (Certeau, 1984) では、ルフェーブルより限定的であるにせよ、「日常生活のレトリックを用いて、人々が都市プランナーの厳格な目から逃れ、中心的なプランナーが実行する都市空間計画の規律的な境界をすり抜ける (slip through) 方法としての『ストリートに住む人びと』の、捉えどころがなく、一見無邪気に見える構図を描いた」と指摘した (Smith, 2001: 116)。『本書』(Smith, 2001)の著者は、

ド・セルトーのこの方法論に賛意を持ちながらも次のように指摘する。「ド・セルトーは、社会的空間が言説的な実践によって、生産され、維持される多様な方法を見ており (Smith, 2001: 116)、「彼の考えかたからするならば、『都市』のまさにその意味が表象の政治と密接に結び付き」(Smith, 2001: 116)、そしてそれは、「言説的な実践は、エスノグラフィックな観察への入り口であり、都市の『孤立的で相互に連結する諸部分』からもうひとつのタペストリーを編むように、都市空間のもう一つの境界に関する心象を構造化する」(Certeau, 1984) と指摘する (Smith, 2001: 116)。前述のように(『本書』の著者がD・マッシーに指摘したように)、このド・セルトーの考え方も、どうしても「グローバルな支配の構造に対する個人的および集団的抵抗としての対立的な空間としての『ローカル』」に限定された「考え方」が透けて見える、と指摘する (Smith, 2001: 116)。『本書』(Smith, 2001)の著者は、(トランスナショナル・アーバニズム論からするならば)『『日常生活』は、言葉の意味での単純なレベルのローカルにあるということではなく、それはグローバルな相互的結合やローカルな抵抗や領域を越境する移動、そして国家的政治や地域的ジレンマ、アイデンティティの編成等々が何時でも起き得るローカルのなかに、存在する。日常生活は固定されたレベルでの分析というよりは、横断的で、論争的な場所のなかに存在する。横断的とは・・・あらゆる境界を横断するというよりは、紛争が明らかにあるそこに、存在するという意味である」と述べる (Smith, 2001: 117)。

こうした意味での「日常生活」を研究する「理論」や「考え方」として『本書』(Smith, 2001)の著者は、A・セイヤー (Andrew Sayer) の言葉 (Sayer, 1989: 255) を引用しながら、「歴史的には特定の時間-空間的な設定のなかに、とりわけ、あるローカリティの設定のなかに行為体すなわち社会的な行為者を位置付ける都市的研究に対して、語りの方々のための説得的な事例と言説 (strong case for a narrative approach) を提起することで、『受身的 (passive)』というよりも『構成主義的 (constitutive)』な設定を認識させること [傍点筆者]」を主張する (Smith, 2001: 118)。『本書』(Smith, 2001)の著者はセイヤーのこうした言葉に沿いながら、「政治経済学とエスノグラフィーの方法論的な融合」(Smith, 2001: 118) を主張した。

筆者の「都市エスニシティ論」の「フィールド」からの「経験」は、「物語を産出する行為体」の「主体」も、筆者の『拙著』から『共著』のエスノグラフィック

な研究過程のなかで、さらに、「日常生活のなかでの実践」に「深化」「拡大」してきたことは、現場から経験した。それならば、筆者の（フィールドからの）「都市エスニシティ論」が提起した（筆者の）「主体」——より一般的な生活のなかに深く、拡大、浸透した「主体」——は、筆者の「都市エスニシティ論」においては、それを「構成主義的」に、どのように「語り」をすればいいのか。それは、例えば本稿の3で述べた「イースト・ビレッジ」での「移民第二世代」の家族の「主体／アイデンティティ」をどのように考えるのか、ということでもある。まさにそれは、現在の「都市エスニシティ論」における「主体」の「理論的世界」の問題でもある。

『本書』（Smith, 2001）では、この「主体の構成」（Smith, 2001: 130）問題を、一端、「ポストモダニティの議論における脱中心の主体（decentered subject）」の問題を経由することで検討しようとしている。『本書』（Smith, 2001）では、まず「脱中心性とはどのような意味か」「主体性は、人間行為体とどのように関係をもつのか、逆に行為する人間主体は、どの歴史的な文脈からどのような可能性や拘束性を被るのか」そして「確かにローカルな意味や実践や権力関係のなかに埋め込まれているのかかわらず、ある種の都市的生活はトランスナショナル化されるのか」といった問題を提起している（Smith, 2001: 130-131）。

『本書』（Smith, 2001）では、一端、S・ホールの言い方を用いて、あるひとつの完全なアイデンティティというよりは、ひとびとがたまたま出会い、移動し、時を越えてそこに棲む多様な社会的空間に対する歴史的に特殊な関係性のなかで構成される、多様で、不完全で、部分的なアイデンティティを経験する『自己（self）』という立場に立つ（Hall, 1988）。そして「このような観点からすれば主体の構成は・・・空間的な特殊性と一時的な矛盾のなかで、必然的に、文脈的で歴史的な主体として解釈されるのが一番いいかもしれない」と述べる（Smith, 2001: 131）。しかし、このような「ポストモダンの主体性は、社会的には解けない問題になる」と述べ（Smith, 2001: 131）、「主体の社会的生産は、特殊な『言語ゲーム』と言説的実践のなかでの『主体的立場』に意味を与える象徴的な意味をとおして常に形成され、転位され、再-形成されるというプロセスの中に置かれてしまう」と付け加える（Laclau and Mouffe, 1985; Lyotard, 1984; Boggs, 1986; Smith, 2001: 131）。そして特に、C・ムフ（C. Mouffe）を引用しながら、その考え方を越えるためには、「脱中心的で、脱統一的な行為体としての主体の

理論を発展させるために、主体は、先験的な関係もなく必然的な関係もないような、多様な主体の立場が交差する地点において形成される」とも指摘する（Mouffe, 1988: 35; Smith, 2001: 131-132）。

しかし『本書』（Smith, 2001）の著者は、ムフの「主体」に関する「考え方」（Mouffe, 1988: 44）にある程度同意しつつも、「多くのコミュニタリアンは、彼ら自身が経験的にそして地理学的に定義されるだろうひとつのコミュニティに帰属すると信じている・・・しかし、私たちは、常に複合的で矛盾する主体であり、多様なコミュニティの居住者であり（彼らは、思い思いに定義される主体的な立場に立ち、きわめて多くの社会的関係に参加する・・・多数の存在であり）、こうした主体の立場の交差する点（intersection）において、一時的に縫合され（temporarily sutured）、多様な言説によって編成されている」と述べる（Smith, 2001: 132）。そして、ムフの言う「主体構成の矛盾する特徴」（Smith, 2001: 132）にある程度の同感を述べるが、しかし、「それが遠方の『開発途上』国の農村であろうが、『発展した』世界の都市の自然発生的なエスニック・エンクレーブに自然的に所属していようが、どちらの一方を、『窮屈で身動きが出来ないコミュニティ』などと簡単に区分できない。それにもかかわらず、ムフが心に描いた多様な主体構成を促す権力と統制の社会構造の特徴が発展途上国であろうが発展的な世界であろうが、問題は、より複雑で異なる都市社会構造に住むかどうかではなく、そこで遭遇し、交差する社会関係の問題に関連しており、それこそが私が呼ぶトランスナショナル都市とよぶものである」と述べ（Smith, 2001: 132）、『本書』（Smith, 2003）では、ここに、もう一つの「連結／節合」の可能性を求める。そこで『本書』（Smith, 2001）では、上記の現代の「主体」を次のように言う。「現在のトランスナショナルな都市にあって、アイデンティティ編成の様式は、人種、ジェンダー、エスニシティ、セクシャリティ、ローカリティ、地域、国家そして多国籍間の社会的抗争から成る節合の差異（articulated difference）に依存する。こうした、個人的および集団的アイデンティティが形成される言説におけるこうした複雑な相互作用は、新たな言説的実践の社会的な基盤の兆しであり、したがって、都市政治における新たな主体の立場の出現である」と指摘する（Smith, 2011: 134）。

筆者は、（フィールドからの）「都市エスニシティ論」からすれば、幾つかの条件を付けて、『本書』（Smith,



2001)のように「日常生活の実践」を「政治」と呼び、それが、「トランスナショナル・アーバニズム」の現状のなかにあることに賛成をしたい。

というのは、筆者の(フィールドからの)「都市エスニシティ論」は、鶴見その他での「日常実践」や、群馬県大泉町での「(下からの)トランスナショナリズム論」を想像させる「起業家」の「行為体」の在り方や「他者性を受け入れつつ日常実践」や「交渉」を行う存在、新宿で経験する「場所の意味付け」や、「沖家室」からの「布哇」での「場所の獲得」、そして「イースト・ビレッジ」の「第二世代」の「主体/アイデンティティ」といった事例は、常にどこでも出現するというよりは、『本書』(Smith, 2001)で「N.Y.での挿話」として述べられた「偶発性」や「一時的な縫合」(あるいは新原道信氏が提起したような「未発の運動」といった条件があってこそ、認識と実践が認められ、そして、これも『本書』(Smith, 2001)で言われたセイヤーの言う「構成主義的」で「説得力のある有効な語り」の方法のための事例や言説、あるいはそれを見る側の研究者側の立場や感性も必要であると、思われるからである。むしろ、(フィールドからの)「都市エスニシティ論」からするならば、そうした「日常生活の実践」を行う「行為体」は、鶴見その他でその姿を見せた時のように、あるいは、新宿やその他のところで、(フィールドからの)「都市エスニシティ論」の「構成主義的」で「説得的語り」の方法をもつ「物語を産出する行為体」とそれを受け止める研究者側の立場も、きわめて大きな条件であると、重ねて主張したい。それがあって初めて、「日常性格の実践」も、「場所-形成」も「主体」も見えてくるということ(フィールドからの)「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を支える条件のひとつとして挙げておきたい。そのうえで、筆者は、(フィールドからの)「都市エスニシティ論」における「構成主義的」な「語り」の方法についても『本書』(Smith, 2001)での「考え方」に沿いたい。『本書』(Smith, 2001)が言うように、現在の「エスノグラフィー」の意味については、「都市の文化を理解しようとする探究は、日常の領域に目を向け、都市エスノグラフィーの生きた言説を紡ぎ出す。方法論的転回は、節合の実践が、彼らの[文脈の]慣習の力を強めたり弱めたりするかについての洞察をどのように獲得するか、ということである」(Smith, 2001: 136)。

「都市エスニシティ論」の「越境者-エスニシティ」や「共振者たち」といった「行為体」の「物語を産出する

行為体」の「主体」、そして「場所への意味付け」による「日常生活の実践」の「主体」の理論的な問題は、日常生活の領域での多様な「文脈」に、「深化」「拡大」している。筆者に言わせれば、『本書』(Smith, 2001)が言うように、(フィールドからの)「都市エスニシティ論」も、「文脈」に寄り添い、ある時はその「文脈」の「一時的縫合」や「偶発性」に助けられ、問題提起をし、「日常生活の実践」の姿が見えてくる、ということを幾度も言いたい。『本書』(Smith, 2001)でのセイヤーの言葉のように、「受け身的」というよりは「構成主義的」に認識する、都市研究の「エスノグラフィックな語り」の方法」を追求することを志向したい。

最後になったが、『本書』(Smith, 2001)での「社会学的構築主義」について、蛇足ながらも触れておきたい。というのは、ここまでのところで『本書』での著者の「社会学的構築主義」の考え方はほとんど説明されている。まとめとして触れておきたい。

『本書』(Smith, 2001)の著者の「行為体-志向の都市社会学」を一種の「哲学」として支える「社会学的構築主義 (social constructionism)」について、「[本書は]この概念を、理論構築のためのアプローチ」として呼んでいる (Smith, 2001: 8)。『本書』の著者にとっての「社会学的構築主義」は、「社会的理論、社会的実践、そして私たちが生きる世界に関する私自身の理解、そしてその関係性に関する四つの主要仮説を作り出す社会的分析としてのメタ-理論的アプローチ (meta-theoretical approach)」と考えている (Smith, 2001: 8)。著者にすれば、「社会学的な理論とは、われわれが見、それについての物語を語り、それに向けて行為するための現実を作る構成要素である」(Smith, 2001: 8)。『本書』の著者は、『「私たちは、他者がそうするように物事をみるのではなく、私たちがそうするように物事を見る」というアナイス・ニン (Anais Nin) の考え方に同意する」と述べている (Smith, 2001: 8)。そして次のようにも付け加えている。「私のアプローチは、それがネオ・マルクス主義であろうが、思い付きのような新自由主義であろうが、社会的行為のための前-与的(性的)な文脈として社会分析者が表現する『構造』、市場、グローバリゼーション、世界システム、後期資本主義、ポストモダンの都市・・・といった概念は、それらはともに、この世界がどのように動くかを理解するための社会的に構造化された理解 (constructed understanding)」と考える (Smith, 2001: 9)。したがって、著者にとって、こうした諸理解は、「歴史的に特定の言説や実践から生まれ、

社会的理論化の言説と実践だけではなく、エリートの政治学者経済学者、そして同様に、通常の人びと(ordinary men and women)、異質なコミュニケーション回路の結び目に立つ、それぞれ状況が異なる『主体の位置』を含む』と考える(Smith, 2001:9)。そして、著者は、この「世界」の動きは、いわば「いかに世界が動くかについての言説や実践的な構成的理解が、権力や意味や差異やアイデンティティに関するそれぞれの文脈の真実が広く認識されるときに、われわれが『構造』と呼ぶ類型的な規則性を生産し、再生産し、変形することができる」というパースペクティブに立つ(Smith, 2001:9)。したがって「社会的主体」と「構造」についても、それは「彼らが参加し、彼らがそこで自身を構成し、自らのアイデンティティを作り、彼らの社会的構造との関係を、コミュニケーションのネットワークをとおして、彼らの生き方に意味を与える。そして、今度はその『構造』が主体間の解釈から教え込まれた社会的実践から、その『構造』を創り出す」存在として考える(Smith, 2001:9)。

## 5. 終わりに

本稿で筆者は、こうした筆者の(フィールドからの/エスノグラフィックな)「都市エスニシティ論」の「方法論」と「理論的世界」について、『本書』(Smith, 2001)の「考え方」と「交差」しながら、述べてきた。特に、できることなら、筆者の「都市エスニシティ論」を、筆者の出発点である都市社会学の「シカゴ学派」の「都市エスニック研究」に「交差」させて、「継承」すべき点を改めて検討することを自身の次の課題としたい。本稿の冒頭のなかでの(フィールドからの)「都市エスニシティ論」で使った「足場や足元」という言葉には、都市社会学の「原点」でもあるシカゴ社会学のパークの言葉——それは、ネルズ・アンダーソンの逸話を入れて、ヒューズが、パークの言葉として伝えたという言葉も参考になる(松本, 2021:121)。「拙書評」(広田, 2022b)も参照して頂ければ幸いである。エスノグラフィの可能性を考えてみたい。

筆者の(フィールドから)「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を知るひとつの「手掛かり」として『本書』(Smith, 2001)のなかで頻繁に出てくる「一時的縫合」や「偶発性」に関しては、前述のように筆者は、鶴見で(フィールドからの)「都市エスニシティ論」の「理論的世界」を理解しようとする時に「未発の運動」という言葉を連想させる(新原, 1995)。ここでの

「フィールド」からのこの「言葉」については、同氏の新たな時代に向けての『うごきをとらえるフィールドワーク』の中でも使用されている(新原, 2022b:27)。新原道信氏は『地域社会学会ジャーナル』(地域社会学会第7大会号)(地域社会学会編, 2022)の、『『移動』の時代/時代の『移動』を生きる人が意味を問うことの意味』という「批評論文」のなかで、『『フィールド』そのものを再定義・再構成し、組みなおしていくようなフィールドワークをいかにして探究するのか』を問いかけている。[あわせて、同氏の『日本都市社会学会年報』(40号)での「書評」(新原 2022c)も参照]。

筆者の「拙論」で整理してきた「方法論」や「理論的世界」は、多くの人々を広い意味での「フィールドからの研究」の中では、どのような「融合」を果たすことができるのか。それも今後の自身の課題である。

## 注

1) 上毛新聞社編『サンバの町から』によれば、群馬県大泉町が日系ブラジル人を呼び寄せたのは、1980年代後半の「労務倒産」の危機を打開するためであると書かれてある(上毛新聞社編, 1997)。なお「東毛地区雇用促進協議会」のY氏への「フィールドノート」にも同様の会話があった(広田, 2003:254)。なお、Y氏(故人)は、当時の大泉町の町長であったM氏とともに、国会議員の働きかけや、ブラジル・サンパウロでの「日本での雇用」の働きかけをした立役者であった(広田・藤原, 2016)。前述の「26人」の「日系ブラジル人」とは、1990年前に群馬県大泉町に來住した人びとであり、「T-センター」のT氏への筆者の「フィールドノート」によれば、例えば、(広田, 2003:255[事例11])等を参照して頂ければ幸いである。「T-センター」も含めて初期の頃のいわば「先遣隊」については(広田, 2003:255[事例11])を参照。なお、大泉町のその後の展開については、上毛新聞社編の『書籍』(上毛新聞社編, 2022)も参照。

2) ここでの筆者の所属大学当時(専修大学人間科学部社会学科)での『2012年度 社会調査実習A, B』(「社会調査協会」に提出)授業の準備のために筆者が単独で行ったフィールドワーク(2012年5月、7月)そして調査実習の当日に行った履修生も含めたインタビュー(8月)を指す。「社会調査実習A, B」は(広田研究室編, 2013)を参照。また、新宿関連の同様の『調査研究報告』としては、『2013年度「社会調査実習A, B」調査報告書 遷移する地域での「場所」認識と共存志向の現在的位相—新宿区行政・新宿大久保通り商店主・韓国同胞団体を中心にした聞き取り調査集—』(芳文社印刷:非売品)、『2014年度「社会調査実習A, B」 新宿多民族地域での「場所」と「ナショナリズム」の様相』(芳文社印刷:非売品)等々がある。

3) スミスとガルニゾの編集になる『*Transnationalism from Below* (下からのトランスナショナリズム)』(1999)には、スミスの紹介として、カリフォルニア大学デイビス校教授で、「コミュニティ研究 (Community studies)、開発論」を専門として、『都市と社会理論—都市、国家、市場』や『資本主義的都市』などを執筆しているとある。また、スミスとガルニゾ編の同書 (1999) に論文を寄稿している文化人類学サラ・マーラー (Sarah J. Mahler) によれば、「一般的に言われているように、『*transnationalism from below*』……は、移民 (migrants) や社会運動と政治的結合の研究であり、特に1994年のM・P・スミスの論文は、まさにその例である」と指摘している (Mahaler, 1999, :68)。なお、M・P・スミスの研究的な位置の紹介、説明として、今野裕昭氏の論文 (今野, 2022) も参照。

### 引用文献

- ・ Basch, L, Glick-Schiller, N and Blanc, Cristina (eds.), 1994, *Nations Unbound*, Gordon and Breach Science Publishers.
- ・ Bonachichi, 1973, "A Theory of Middleman Minorities" *A.S.R.*, Vol.38.
- ・ Certeau, M, 1980, *Art de Faire Union* Générale d'Éditions (=1987, 『日常の実践のポイエティック』山田登世子訳, 国文社).
- ・ Faris, R.E.L, 1967, *Chicago Sociology 1920-1932*, Cihandeler (=奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー1920-1932』ハーベスト社, 1990年).
- ・ Gilroy, P, 1996, "British Cultural Studies and the Pitfalls of Identity in Black British Cultural Studies A Reader" (=毛利嘉孝訳「英国のカルチュラル・スタディーズとアイデンティティの落とし穴」『現代思想』1998, 青土社).
- ・ Gupta, A and J.Ferguson (eds.), *Culture, Power, Place*, Duke University Press.
- ・ 広田康生, 1997, 『エスニシティと都市』有信堂.
- ・ 広田康生, 2003a, 「越境する知と都市エスノグラフィ編集——トランスナショナリズム論展開と都市的世界」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編『都市的世界/コミュニティ/エスニシティ——ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石書店.
- ・ 広田康生, 2003b, 『[新版] エスニシティと都市』有信堂.
- ・ 広田康生, 2016, 「推移する新宿『コリアタウン』における『場所形成』の諸相」『専修人間科学論集 (社会学篇)』第6巻第2号 (専修大学人間科学学会).
- ・ 広田康生, 2021, 「『行為体-志向の都市社会学』と再-表象化される都市エスニシティ論—『源流』の初期シカゴ学派/S.Personsの『再-表象』/M.P. Smithのトランスナショナル・アーバニズム論—」『専修人間科学論集 (社会学篇)』第11巻第2号 (専修大学人間科学学会).
- ・ 広田康生, 2022a, 「『都市エスニシティ論』の『フィールドからの理論』と『行為体-志向の都市社会学』—『トランスナショナル・コミュニティ』の視界と枠組み—」『専修人間科学論集 (社会学篇)』第12巻第2号 (専修大学人間科学学会).
- ・ 広田康生, 2022b, 「(書評) 松本康著『「シカゴ学派」の社会学——都市研究と社会理論 (有斐閣, 2021年)』」『日本都市社会学年報』40号.
- ・ 広田康生・藤原法子, 2016, 『トランスナショナル・コミュニティ—場所形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社.
- ・ 広田研究室編, 2013, 『2012年度「社会調査実習 A, B」調査報告書「トランスナショナル・コミュニティ」として見た新宿大久保・百人町—「場所」への注目と「下からの都市空間」形成—』(芳文社印刷所:非売品).
- ・ 五十嵐泰正, 2019, 『上野新論——変わりゆく街、受け継がれる気質』せりか書房.
- ・ 上毛新聞社編, 1997, 『サンバの町から—外国人と共に生きる』上毛新聞社.
- ・ 上毛新聞社編, 2022, 『サンバの町 それから——外国人と共に生きる群馬・大泉』上毛新聞社.
- ・ 今野裕昭, 2022, 「海外ライフスタイル移住の社会的意味」『専修人間科学論集 (社会学篇)』第12巻第2号 (専修大学人間科学学会).
- ・ Mahaler, S, 1999, "Theoretical and Empirical Contributions Toward a Research Agenda for Transnationalism" in Smith and Guarnizo (ed.), 1999, *Transnationalism From Below*, Transaction Publishers, New Brunswick, New Jersey.
- ・ Massey, D, 1993, "Power Geometry and a progressive sense of place" in Bird, Curtis, Putnam Robertson, Tikner (eds.), *Mapping the Futures : Local cultures Global change*, Routledge (=「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」加藤政洋訳, 2002, 『思想』No.933).
- ・ 松本康, 2021, 「『シカゴ学派』の社会学——都市研究と社会理論」有斐閣.
- ・ 新原道信, 1995, 「『移動民』の都市社会学—“方法として旅”をつらねて」奥田道大編『21世紀の都市社会学 コミュニティとエスニシティ』勁草書房.
- ・ 新原道信編, 2022a, 『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』ミネルヴァ書房.
- ・ 新原道信, 2022b, 「『移動』の時代/時代の『移動』を生きる人が意味を問うことの意味」『地域社会学学会ジャーナル』No.6 (『地域社会学学会第47回大会号』第47回大会シンポジウム・批評論文) 地域社会学学会ジャーナル発行委員会.
- ・ 新原道信, 2022c 「(書評) 平田周・仙波希望編著『惑星都市理論』(以文社, 2021年)」『日本都市社会学年報』40号.
- ・ Okihiro, M, eds, 2003, *A'ala : the story of a Japanese Community in Hawaii* Hochi.
- ・ 奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場—越境するエスニシティと21世紀都市社会学』東京大学出版会.
- ・ 奥田道大, 2009, 『人びとにとって『都市的なるもの』とは



- 新都市社会学・序説』ハーベスト社.
- ・大谷松次郎, 1971, 『わが人なりし足跡』 文洋社.
  - ・Persons, S, 1987, *Ethnic Studies at Chicago 1905-45*, University of Illinois Press, Urban and Chicago.
  - ・阪口毅, 2022, 『流れゆく者たちのコミュニティ——新宿・大久保と『集合的な出来事の都市モノグラフ』 ナカニシヤ出版.
  - ・Sluzky, C.E, 1979, “Migration and Family Conflict” *Family Process*, Vol.18.
  - ・Smith, M.P and Guarnizo, L (eds), 1999, *Transnationalis*  
*From Below*, Transaction Publishers New Brunswick and London.
  - ・Smith, M, P, 2001, *Transnational Urbanism*, Blackwell Publishing.
  - ・志水宏吉, 2001, 『ニューカマーと教育』 明石書店.
  - ・Ueda, R, 2002, “An Early Transnationalism? : The Japanese American Second Generation of Hawaii in the Interwar Years”, P. Levitt and M.C Waters (eds.) *The Changing Face of Hhome*, New York : Russell and Sage Foundation.